

仮面の恐怖王

江戸川乱歩

青空文庫

ロウ人形館

東京上野公園の不忍池しのばずのいけのそばに、ふしぎな建物がたちました。両国りょうこくのほとんどの国技館をぐつと小さくしたような、まるい建物で、外がわの壁も、まるい屋根も、ぜんぶ、まっ白にぬつてあるのです。そして窓というものが、ひとつもありません。

正面に小さな入口があつて、その入口の上に「中曾夫人ロウ人形館」ちゆうそというかんばんがかかつています。

イギリスのロンドンにタツソー夫人のロウ人形館というのがあつて、世界じゆうに知られていきます。この不忍池のロウ人形館は、それをまねたものなのです。タツソーという夫人の名をフランス読みになると、チュツソーとなります。「中曾夫人」というのはチュツソーをもじつたものにちがいありません。そのまるい建物は二階だてに地下室があり、その中を見物人の歩く道がぐるぐるまわつていて、道のかたがわ、または両がわに、いろいろなロウ人形の場面がつくつてあるのです。

ロウ人形はみんな人間とおなじ大きさで、それに服がきせてあるのですが、ロウででき

た顔がまるで生きてるように見えるので、じつにきみがわるいのです。

ロンドンのタツソー夫人口ウ人形館には、歴史上のおそろしい場面や、血なまぐさい場面がいろいろこしらえてあつて、女の人などは、ひとりでははいれないということです。

東京の中曾夫人口ウ人形館も、それをまねたものですから、やっぱり、ものおそろしい場面がおおくて、女の人や、子どもをつれた人は、きみわるがつて、めったにはいりません。せつかくつくつた口ウ人形館もいっこうはんじょうしないのでした。

ある土曜日の午後三時すぎのことでした。ふたりの少年が、この中曾夫人口ウ人形館へやってきて、入口でキップを買つて中にはいりました。

ひとりには井上二郎君いのうえじろうという中学一年生、もうひとりは野呂一平君のろいつぺいという小学六年生で、ふたりとも胸に少年探偵団のB・Dバッジをつけています。

井上君は、がっしりとした体格で背もたかく、柔道をならっている強い少年です。野呂君は、少年探偵団員のなかでも、いちばんおくびようものですが、すばしっこくて、ちゃめで、みんなを笑わせることがうまいので、人気者です。ノロちゃんという愛称でよばれています。

ふたりは、口ウ人形館のうわさを聞いて、きようはじめてやってきたのです。探偵団員

のことですから、きみのわるいようなものは、一度見ておきたいのでしょうか。おくびょうもののノロちゃんも、こわいもの見たさで、力の強い井上君にくつついて、やってきたのです。

ロウ人形館の入口をはいりますと、うすぐらい廊下がつづいています。見物人の姿はひとりも見えません。なんだか、あき家の中へはいつていくようで、きみがわるいのです。

「いやだなあ。どうして、こんなにさびしいのだろう。見物人は、ぼくたちだけじゃないか。」

ノロちゃんが、井上君に、からだをくつつけるようにして歩きながら、いいました。

「いや、もつとむこうへいったら、見物人がいるかもしれないよ。だが、だれもいなくなつたつて、いいじゃないか。ふたりきりのほうが、かえつておもしろいぜ。」

井上君は、さびしいことを、よろこんでいるようです。

そのとき、うすぐらい廊下の右がわに、ぽつと四角な光がさしました。そのドアがひらかれたのです。ドアの中には、あかるい電灯がついているのです。

その電灯の光を背中にくけて、まっ黒な人の姿がドアから出てきました。

「あなたがた、よく来てくれましたね。わたしが、そこまで案内してあげましょう。」

女の声でした。ドアをしめると、その人のようすがわかるようになりました。三十五―六の、うつくしい女の人です。スカートが長い、まっ黒な服をきて、かみをみようなゆい方にして、その上にちよこんと帽子をのせています。井上君もノロちゃんも、本で見た明治時代の西洋婦人の絵を思い出しました。

「おばさんは、中曾夫人じゃありませんか。」

ノロちゃんが、ふと気がついて、ぶえんりよにたずねました。

「ええ、わたしが中曾夫人です。わたしがこのロウ人形館をたて、中にかぎつてあるロウ人形も、みんなわたしがつくつたのです。」

夫人はとくいらしくいって、さきにたつて、ふたりをおくのほうへ案内しました。

鉄仮面

「ごらんなさい。これは世界各国の代表者が集まって、戦争をなくする相談をしているところですよ。」

廊下の右がわがぱつとひろくなつて、そこに、りっぱな広間があらわれました。てんじ

ようからはキラキラひかる水晶玉すいしやうだまのついたシャンデリアがさがり、床ゆかにはまっかなじゆうたんがしきつめられ、壁には大きなだんろ、その上には二メートル四方しほうもあるような鏡がはめこみになっています。

そのりっぱな部屋のまん中に大きなだ円形のテーブルがおかれ、そのまわりに十人ほどの世界の有名な政治家が、おもいおもいの服装で安楽いすにこしかけています。

その中には、アメリカのアイゼンハワー大統領の顔が見えます。ソ連のフルシチョフ首相の顔が見えます。それから、中国の毛沢東もうたくとう主席の顔も、インドのネール首相の顔も、それから日本の岸首相の顔もならんでいます。

それらの口ウでできた顔が、あるものはニヤニヤ笑い、あるものはしかめつつらをし、あるものは口をひらいて、なにかしゃべっているのです。

人間とおなじ大きさの口ウ人形です。顔と手足が口ウでできていて、からだには、それぞれの国の服がきせてあります。

ほんとうに生きています。いまにも動きだしそうです。

ふたりの少年はびっくりして、くいいるように、この場面を見つめました。

「どうです。みんな生きています。しかし、こんな世界会議は、まだひらかれてい

ません。まだ戦争をなくする相談は、なりたっていないのです。この場面はわたしの空想ですよ。こうして、世界の大きな国の代表者たちが一室に集まって、もう、けっして戦争をしないという、もうしあわせをしたら、どんなにいいかとおもうのです。」

中曾夫人はそういつて、なおも説明をつづけるのでした。

このロウ人形館の中には、こういう場面が二十以上あります。むろん、政治家ばかりではありません。有名などろぼうや名探偵の人形もあります。アルサーヌールパンが、奇きがん岩城じょうの階段をかけおりているところや、シャーロックホームズが、悪漢モリアーティとたたかっているところもあります。

それから、石の牢屋ろうやにとじこめられている鉄仮面、たかい塔の屋根を金色こんじきのヤモリのように、はいあがつている黄金仮面、夜の銀座を四つんばいになって走っている青銅の魔人、地下室の石の階段をおりてくるどくろ仮面、劇場の廊下にあらわれた笑いの面、そのほか、たくさんたくさんの仮面の怪人や、人造人間の場面がつくつてあります。

「この道を歩いていけば、それらの場面がみんな見られるのです。では、ゆっくりごらんなさい。わたしは仕事がありますから事務室へかえります。」

中曾夫人はそういつて、二少年を、その場におきざりにしたまま立ちさっしてしまいまし

た。

ふたりは、しかたがないので、そのまま、おくのほうへ歩いていきました。

中曾夫人のいったとおり、つぎつぎと、いろいろな場面がありました。怪盗ルパンや、名探偵ホームズのいる、いくつかの場面もありました。そして、つぎの場面には……、

「あつ、小林さん。」

「あつ、明智先生。」

井上君とノロちゃんは口々にさげんで、その方へ、かけようとなりました。そこに名探偵明智小五郎こごろうと、その助手の小林少年が立っていたからです。小林少年は少年探偵団の団長でもあります。

かけようとする、すぐに、木ですりにぶつかりました。明智先生と小林少年は、そのですりのむこうがわに立っているのです。

よびかけても、なにもこたえません。こちらを見ようとしません。ただ身動きもしないで、つつ立っているばかりです。

「あつ、これもロウ人形だよ。……おどろいたなあ。先生や小林さんと、そっくりの顔をしている。よくこんなになせたものだなあ。」

井上君がすっかり感心して、うなるようにいました。

それから、すこしいくと、鉄仮面の部屋でした。

石でくんだ、ふるい牢獄です。たかいたところに鉄棒のはまった小さな窓があるきりの、くらい牢屋です。そこに、あの有名な鉄の仮面で顔をつつまれた人物が立っています。

フランスのルイ十四世の時代ですから、今から三百年近くも昔のことです。バスチーユの牢獄に仮面をかぶせられた罪人がおりました。その罪人は牢獄で病死したのですが、死ぬまで仮面をかぶせられたまま、一度も顔を見せたことがないのです。

いったい、この仮面の囚人は何者だったのでしょうか。それはだれも知らない秘密でした。フランスの小説家たちは、この秘密をいろいろに想像して鉄仮面の小説を書きました。そのために、いつそう鉄仮面の名は有名になったのです。日本にも二つの鉄仮面の小説がほんやくされています。デュマ原作のものと、ボアゴベ原作のものです。

井上君とノロちゃんが見ているのは、バスチーユの石牢にとじこめられた鉄仮面です。その前に五十歳ぐらいの、がっしりした男が腰をかがめて、なにかしゃべっているところですよ。牢番なのでしょう。

鉄仮面は、口のところがちょうつがいひらくようになっていて、食事をさせるときに

は、牢番がかぎで、それをひらいてやるのでした。そうして口をふさいでおくのは、むやみにものをいわせないためなのでしょう。

井上君もノロちゃんも、「鉄仮面」の小説をよんでいたもので、このロウ人形の場面を、いつそう、ものおそろしく感じました。

ふたりは、その場面のまえに立ちつくして、ながい間ながめていました。

「鉄仮面って、いったい、だれだったのだろうね。」

「王さまの兄弟だったともいうし、大臣だったともいうし、僧そうじょう 正ただだったともいうし、まだいろいろの説があるんだよ。とにかく、顔をかくしておかなければならないというのは、世間によく知られた、えらい人だったにちがいないよ。」

井上君がノロちゃんに話してきかせました。

「あの鉄仮面の中に、どんな顔があるんだろうね。」

「これは人形だから、鉄仮面の中は、からっぽだよ。それとも……。」

井上君は、そこまでいって、だまってしまいました。

もしあの鉄仮面の中にロウでつくった人間の顔があるとしたら、それはどんな顔だろうとおもうと、なんだか、こわくなってきたからです。

「つぎの場面へいこうよ」

井上君はノロちゃんの手をひっぱって、むこうへ歩いていきました。ひとつかどをまがると、そこに、つぎの場面があるのですが、そのかどをまがったとき、ノロちゃんが井上君の手をぐつとひっぱって、あいずをしました。

「あいつに気づかれるといけない。そつと、のぞいてみるんだよ。ほらね、動いているだろう。」

ノロちゃんは、井上君の耳に口をつけるようにして、ささやきました。

井上君が、まがりかどから、そつと顔をだして、鉄仮面の場面をのぞいてみますと、そこには、じつにふしぎなことがおこっていたのです。

ロウ人形の鉄仮面が歩き出したのです。どこにかくしてあったのか、黒いマントのようなものを取り出して肩からはおり、木のですりをのりこして通路に出ると、そのままスタスタと、むこうへ歩いていくではありませんか。

怪自動車

「ノロちゃん、あいつのあとを尾行しよう。さあ、来たまえ。」

井上君がノロちゃんの手をひっぱって、鉄仮面のあとを追いました。

鉄の仮面は目も口もふさがれているように見えますが、鉄板のあわせめに細いすきまがあつて、そこから外がのぞけるのでしよう。そうでなければ、鉄仮面があんなにはやく歩けるはずがありません。

それにしても、じつに異様なできごとでした。ロウ人形とばかり思っていた鉄仮面が、いきなり歩きだしたのです。むろん人形ではなくて、生きた人間にちがいありません。

鉄仮面は、ふたりが尾行しているとも知らず、通路をグングン歩いていきましたが、ヒョイと立ちどまって、いつぼうの壁をおしますと、そこに秘密のドアがあつて、鉄仮面はすいこまれるように中へはいっていききました。

二少年も、すぐそこへいって、ドアをおしますと、しまりを忘れたらしくスーツとひらきましたので、ふたりとも中へはいりました。

うすぐらい細い通路があります。一本道なので、そのまま歩いていきますと、ロウ人形館のよこての裏口のようなところへでました。

外はもう夕ぐれどきでした。むこうに不忍池がひろがっています。うしろには電車通り

のネオンがひかっっていました。

見ると、すぐむこうに一台の黒い自動車がとまっています。鉄仮面はマントをひるがえして、そこにかけてつけ、自動車の後部席へとびこみ、パタンとドアをしめました。

すると、それがあいずだったように、車はすぐに走りだし、むこうに遠ざかっていって、やがて夕やみの中にとけこむように、見えなくなってしまうました。

あいにく、そのへんに、ほかに自動車はなく、二少年は怪人のあとを追うことができませんでした。

それにしても、なんとというへんてこなことが、おこったものでしょう。ロウ人形館の形が、とつぜん動きだし、館の外に待たせてあった自動車にのって、どことも知れず逃げだしてしまったのです。

二少年は、あまりのふしぎさに、しばらくは、ぼんやりと、そこに立ちつくしていました。やがて気を取りなおすと、このことを中曾夫人に知らせるために、正面の入口へといそぐのでした。

ふたりはキップ売場からはいって、廊下にあるさっきのドアをノックしました。

「おはいりなさい。」

中から中曾夫人の声がこたえました。

二少年はドアをひらいて、中にはいました。

そこは夫人の事務室らしく、まんやかに大きなデスクがあり、その上に、いろいろな書類が積みかさねてあります。夫人がこしかけているうしろには大きな本だながあつて、西洋の本や日本の本がぎっしりつまっています。

「ああ、さっきのぼうやたちですか。ひどくあわてているじゃありませんか。」

明治時代の洋装をして、帽子をかぶったまま、中曾夫人はいすから立って、二少年のほうへ近寄ってきました。

「鉄仮面が逃げだしたんです。」

「裏口から出て、自動車にのつて、どっかへ行ってしまいました。」

「え、なんですか？」

夫人は、びつくりしたように、聞きかえします。

「あのロウ人形の鉄仮面が逃げたのです。」

それを聞くと、夫人は笑いだしました。

「あなたがた、ゆめでも見たのですか。ロウ人形が歩きだすなんて、そんなばかなことが

あるもんですか。」

「いいえ、ほんとうです。うそだと思うなら、鉄仮面の場面を見てください。あそこには牢番が残っているばかりです。」

「よろしい。では、見にいきましょう。あなたがたも、いつしよに来てください。」

夫人はそういって、さきにたつて部屋の外へ出ると、グングンそのほうへ歩いていきました。二少年もそのあとにしがいます。

いろいろな場面をとおり過ぎて、鉄仮面の場面にたどりつきました。

「やっぱり、あなたがた、ゆめでも見たのでしよう。鉄仮面は、あそこにいるじゃありませんか。」

少年たちは「あつ。」とおどろきました。

夫人のいうとおり、鉄仮面はいつのまにか、ちゃんと、そこへもどっていたではありませんか。もう黒マントはぬいで、どこかへかくしてしまったらしく、もとのとおりの姿です。

「ふしぎだなあ、ゆめじゃありませんよ。ぼくたちふたりが、この目で見たんです。自動車にのって逃げてしまった鉄仮面が、どうして、ここへもどったのでしよう。ぼくには、

なにがなんだか、さっぱり、わけがわかりません。」

井上君はそういって、しばらく考えていましたが、ふと気がついたように、

「ぼく、あの人形にさわってみてもいいでしょうか。」

「ええ、よろしいとも、ふたりとも、中にはいって、さわってごらんなさい。」

そこで、井上君とノロちゃんは、木のですりをまたいで石の牢屋の中にはいり、鉄仮面のそばに寄って、そのからだにさわってみました。

からだをたたくと、コツコツ音がしました。両手は、たしかに、つめたい口ウでできていました。足もよくしらべましたが、やっぱり、ズボンの中には、木のようにかたいものがあるばかりでした。

「へんだなあ。これはたしかに人形です。でも、こいつは、さつき歩いてここから出たのです。そして自動車にのって、逃げていったのです。」

井上君が、ふしぎでたまらないという顔で、つぶやきました。

星の宝冠

おはなしはかわつて、その日の夜のことです。みなと港区の有馬ありまだいすけ大助君という少年のおうちに、おそろしいことがおこりました。鉄仮面はやつぱり口ウ人形館からぬけだして、有馬君のおうちへ、しのびこんでいたのです。有馬君のおうちは大きな西洋館で、おとうさんは、ある会社の社長さんでした。大助君は、その長男で、小学六年生なのです。

大助君は、そのぼん十一時ごろ、ふと目がさめて、お手洗いへいきたくなつたので、パジャマのままベッドを出て、用をすませ、廊下をもどつてきました。

その広い廊下のすみに、西洋のむかしのよろいがかぎつてあります。銀色にみがいた鉄のよろいです。おなじ銀色の西洋のかぶととほおあてをつけているので、まるで人間が、よろい、かぶとをきて、立っているように見えます。

夜なんか、その前をとおると、きみがわるいようです。大助君は、なれているので、べつに、こわいとは思いませんでしたが、とおりがかりに、ふと、そのよろいを見ますと、どこかしら、いつもとは、ちがつているような気がしました。

へんだなとおもつて、じつと見なおしました。

ああ、そうです。かぶととほおあてがいつもとちがつているのです。色はおなじ銀色ですが、形がちがうのです。

「あつ！ 鉄仮面だつ。」

大助君は、おもわず、心の中でさげびました。

大助君は、「鉄仮面」という小説を読んだことがあります。いま、目の前にあるよろいの頭のところは、その小説のさしえにかいてあつた鉄仮面と、そっくりではありませんか。きみがわるくなつたので、大助君は、そのまま、廊下のかどをまがりましたが、やつぱり気になるものですから、そのかどから、そつと、目だけだして、よろいのほうを見えました。

すると、ク、ク、ク、ク……という、みような音が、どこからか聞こえてきました。人間が声をたてないで、笑っているような音です。

もしかしたら、あの鉄仮面をかぶつたよろいの中に、人間がかくれているのではないか、と思うと、大助君はゾーツと、かみの毛がさかだつような気がしました。

そのときです。こんどは、もつとおそろしいことがおこりました。

鉄仮面の頭をもつた西洋のよろいが動きだしたのです。

はじめは、ゆらゆらと、からだを前後に、ゆりうごかしていましたが、やがて、銀色のよろいがノツシ、ノツシと歩きだしたではありませんか。

大助君はびつくりして、逃げだそうとしましたが、あいては、そのまがりかどに大助君がかくれているのを、はやくも、さとつたらしく、ぱつと、こちらへ、とびかかってきました。

そして、銀色にひかかった鉄仮面が、大助君の目の前いっぱいひろがり、銀色のよろいの手が、ギュツと、大助君の肩をつかみました。

「たすけてくれーっ……。」

さげぼうとしましたが、その口を、いきなり、怪物の鉄の手でふさがれてしまいました。それから、鉄仮面は大助君をだきあげて、寝室の中にはこび、ベッドのシーツをひきさいて、大助君にさるぐつわをはめ、手足をしばり、外に出てドアにかぎをかけると、そのまま、どこかへ立ちさつてしまいました。

それから、しばらくして、鉄仮面は、有馬家の美術室に、そのぶきみな姿をあらわしました。

大助君のおとうさんの有馬さんは、まだおきていて、書斎で手紙を書いていましたが、美術室の仏像をしらべてみなければならぬことがおこりましたので、美術室へやってきました。

そして、ドアをひらくと、美術室の中に、みようなものが動いているのが見えましたので、いそいでドアをしめ、ごくほそいすきまを残して、そこから部屋の中をじつとながめました。

美術室には、たくさん棚があつて、そこにいろいろの美術品がならべてあるのですが、壁ぎわに金庫が置いてあります。それには、美術品のなかでも、いちばんだいじなものがしまつてあるのです。

その金庫の前に西洋のよろいが、うづくまつて、ダイヤルをまわしているではありませんか。廊下においてあつたよろいが、ここまで歩いてきて金庫をあげようとしているのです。

有馬さんは、よろいの頭が鉄仮面にかわつているとは、気がつきませんが、いずれにしても、よろいの中に人間がはいっていることはたしかです。

どろぼうが昼間のうちに、やしきにしのびこみ、よろいの中にかくれていて、夜がふけるのを待つて、金庫の中のをぬすもうとしてやつてきたのです。

有馬さんは、そつとドアをしめて、いそいで書齋へひきかえしました。そして、その卓上電話の受話器を取りあげると、知りあいの私立探偵明智小五郎の事務所をよびだすの

でした。

「明智先生ですか。わたし、いつかお世話になりました有馬です。いま、わたしのうちに、へんなことが、おこっているのです。廊下にかぎってあった西洋のよろいの中に、だれかがはいつて、美術室の金庫をあけようとしているのです。金庫の中には『星の宝冠』というわたしの家の宝物が、はいつています。すぐに来てくださいませんか。……むろん警察に知らせます。しかし、これはどうも、ふつうのどろぼうじゃありません。やつぱり、あなたに来ていただかないと、安心できないのです……。」

そこまで話したとき、書斎のドアがスーッとひらきました。そして、そこに銀色にひかる西洋のよろいがたつていたではありませんか。

「明智小五郎に電話をかけたな。明智をよぼうというのか。そうはさせないぞ。」
鉄仮面のすきまから、しわがれた、ふとい声もれてきました。

有馬さんは、あまりのことに、ぼうぜんと、立ちすくんだまま、ものをいう力もありません。

鉄仮面は、ツカツカと有馬さんのそばに寄ってきました。そして有馬さんの手から受話器をひったくると、それを左手に持ち、右手にはピストルをかまえて、有馬さんが声を立

てないようにおどしつけながら、電話口の明智探偵に話しかけるのでした。

「明智君だね。おれはどろぼうだ。てごわいどろぼうだ。せけんでは、おれのことを恐^{きょう}怖^{ふお}王^{おう}とよんでいるよ。このうちへは『星の宝冠』をもらいにきた。金庫のあけかたも、ちやんと研究しておいたので、わけなく宝冠を手にいれることができたよ。ハハハハ……。だから、もうきみは来なくてもよろしい。来ても、しかたがないのだ。きみがここへつくころには、おれは遠くへ立ちさつているからね。」

すると、電話のむこうから、明智探偵のおちついた声がそれに答えました。

「きみが来るなどいっても、ぼくは有馬さんにたのまれたのだから、いかなければならぬい。きみは逃げだすだろうが、どこへ逃げて、きつと、つかまえてみせるよ。きみは、そのうちに、なにかてがかりを残している。指紋なんか、いくらふきとってもだめだ。もつとほかの、目に見えないてがかりが、いくつも残っているはずだ。ぼくはそれをさがす。そしてきみが何者であるかを、つきとめ、かならず、とらえてみせる。ハハハ……。それが、ぼくの仕事だからね。」

名探偵の自信ありげな声を聞くと、鉄仮面はいらいらしてきました。

「よしつ、それじゃあ、かってにしる。おれのほうにも、考えがある。いまに、こうかい

するんじゃないぞ。きさまは、おれが、どれほどの力を持っているか、まだ知らないのだからな。ワハハハハ。」

そこで、いきなり電話をきくと、こんどは、べつの番号をまわして、だれかをよびだし、暗号のようなことばで、なにかしばらく話していましたが、そばに立っている有馬さんにも、そのいみは、すこしもわかりませんでした。そのあいては、おそらく、どろぼうの手下かなんかだったのでしよう。

ふしぎな部屋

おはなしかわって、ここは明智探偵事務所の一室です。

「ハハハハ……、おもしろくなってきたぞ。てごわいどろぼうが、あらわれたぞ。小林君、有馬さんの有名な『星の宝冠』がぬすまれてしまった。それから、いま電話がかかったのだ。ぼくに来ちやいけないうって、いったよ。やつぱり、ぼくがこわいんだね。だから、すぐいくことにする。自動車をよんでくれたまえ。」

明智探偵が、そばにいる助手の小林少年にいつけました。

「先生ひとりですか。ぼくは、いかなくていいのですか。」

小林少年が、ふふくそうにいいいます。

「きみは、留守番だ。ぼくに万一のことがあったとき、ぼくをたすけるのが、きみの役だからね。きみとぼくとは、なるべく、はなれているほうがいい。」

そういわれると、小林少年も、かえすことばがありません。すなおにハイヤーの会社へ電話をかけました。

しばらくすると、明智の事務所のある高級アパートの入口で、自動車のクラクションがなりました。「おむかえにきました。」というあいずです。明智探偵は小林少年に留守をたのんで、ひとりで玄関から出てきました。そして、その大通りにとまっている自動車のほうへ歩いていきます。すると、そのとき、へんなことがおこったのです。アパートの前のくらのやみの中から、ひとりの男が、とびだしてきました。三十ぐらいの、よたもののようなやつです。その男が明智探偵のうしろへ、そつと近寄っていくのです。自動車のドアはあいていました。明智はその中へはいろうとしましたが、なにを感じたのか、はつとしたように身をひきました。いつもの自動車とちがっていることがわかったからです。運転手もへんなやつだし、うしろの席に、見かけたことのない男が腰かけていたのです。

身をひこうとすると、うしろから、どんと、ぶつかってくるものがありました。さつき、やみの中からあらわれた、よたものみたいなやつです。

そいつは、明智のからだをグングン自動車の中へ、おしこもうとします。すると、中にいたやつも腰をあげて、明智の首に腕をまきつけ、ちからいっぱい、車の中にひっぱりこむのです。

あいてはふたりのうえ、ふいをつかれたので、さすがの名探偵もどうすることもできません。もう十二時に近い夜ふけですから、人どおりもなく、だれもたすけにきてくれるものはありません。

しかたがないので、大きな声でさげぼうとしました。すると悪者は、はやくも、それをさつして、白いハンカチのようなもので、明智探偵の口と鼻をふさいでしまいました。

ツーンと頭にひびくような、いやなおいがしました。麻酔薬ますいです。……まもなく、名探偵は、自動車の中で気をうしなっていました。

× × × ×

明智探偵は、ゆめからさめたように、ふと目をひらきました。

見まわすと、なかなか、いごこちのいい部屋です。せまい部屋ですが、一世紀もまえの

フランスの客間を思いだすような、ぜいたくな、うつくしい部屋でした。

てんじょうからは水晶玉でかざったシャンデリアがさがり、白くぬった、きゃしゃなテーブル、ふかぶかとしたクッションの、りっぱな長いす。

明智は、やつと思いだしました。

「ああ、ぼくは、悪者につかまえられたのだ。そして、麻酔薬をかがされて、気をうしなつてしまったのだ。」

まだしばらくられているのではないかと、手足を動かしてみました。まったく自由でした。ただ長いすの上によこになって、グツスリねむっていたらしいのです。

そのとき、明智が目をさますのを待ちかねていたように、ドアがあいて、ひとりのうつくしい少女がはいつてきました。高校生ぐらいの年ごろです。手にはコーヒーをのせた銀のぼんをささげています。

「お目ざめになりました？」

少女は銀のぼんをテーブルの上において、やさしく明智探偵に話しかけました。

「ほんとうに、たいへんでしたわね。でも、どこもおいたみになりません。」

明智探偵は、ゆめみたいないな気持で、しばらくぼんやりしていました。どうもわけがわ

かりません。

「ここは、いつたいどこの、おうちなんでしょう？　そして、あなたは？」
と、たずねてみました。

「あなたを、おたすけしたひとのうちですわ。あたしは、そのうちのむすめです。」

「そうでしたか。ぼくは悪者のために自動車におしこまれ、麻酔薬をかがされて気をうしなってしまったのですが、あれから、どのくらい時間がたったのでしょうか。そして、ここは、やっぱり東京なのでしょうか。」

「ええ、まあ、そうですね。でも、あなたは、まだ、いろいろなこと、お考えにならないほうがよろしいですわ。」

「なあに、もう、だいじょうぶですよ。どこも、なんともありません。すこし、頭がフラフラするぐらいのものです。」

明智はそういって、長いすの上に、おきなおってみせました。しかし、そうして身をおこしてみると、やっぱり、からだがおんどうでないのか、部屋ぜんたいがグラグラゆれているように感じて、おもわずいすの上に手をつきました。

「まだ、だめです。めまいがします。なんだか、この部屋がフワフワと、宙にういている

ような気持です。」

「ほら、ごらんなさい。むりをしてはいけませんわ。」

「しかし気分はなんともないのです。どうか、ご主人にあわせてください。おれいをいわなければなりません。」

「そんなことはいいんです。それに、いま主人はおりませんし……。」

そのとき、明智は、この小部屋のつくりかたが、どうも、ふつうでないことに、やっと気がつきました。

「おやつ、この部屋には窓がひとつもありませんね。だから、昼間でも、こうして電灯をつけておくのですか。みような部屋ですね。いったい、いまは昼ですか、夜ですか。」

「夜ですの。いま八時ですわ。」

「いく日の?。」

「十六日。」

少女はそう答えて、口に手をあててクスクス笑いました。

「ぼくが自動車におしこめられたのは、十五日のぼんだから、あれから、まる一日たっているわけだな。」

と、ひとりごとをいったものの、なんだかへんな感じでした。この少女の、みょうになれならしい口のききかた、窓のひとつもない部屋、それに、いつまでたっても、部屋がユラユラゆれているような感じ。

「この部屋は、いったい、何階にあるのです。なんだか、いつもユラユラしていて、高い塔の上にも、いるような気持ですね。」

「そうかもしれませんわ。」

少女は、心の中で笑っているような口ぶりです。

「でも、いごこちは、わるくないでしょう。しばらく、おとまりになる間、できるだけ、お心持ちのいいようにと、いいつけられていますのよ。お気にめさないことがありましたら、なんでも、おっしゃってくださいまし。」

少女はなかなか、おせじがいいのです。

「しばらく、おとまりですって？　じょうだんじやありません。ぼくは、だいじな用件があるんですよ。」

明智探偵は、あきれかえってしまいました。まるでキツネにつままれたような気持です。「いいえ、そんなにおあせりになつては、だめですわ。なにもお考えなさらないほうがい

いわ。」

少女は、まるで、きのどくなきちがいでもなくさめるような調子で、

「では、のちほど、またまいりますわ。さめないうちにコーヒ―を、めしあがってくださいまし。」

少女はそういいすてて、逃げるようにドアのほうへいきますので、明智は、「まってください、まってください。」と、よびかけながら、いすから立ちあがって少女のあとをおかけようと思いました。二―三步あるくと、なにかに足をとられて、バツタリたおれてしまいました。

「ホホホホ……、ほらごらんなさい。ですから、じつとしていらっしやるほうがいいのよ。」

少女はあざけるようにいって、ドアのほうへ歩いていきました。

気がつくとき、明智探偵の足くびに、鉄の輪がはめてあって、それについた鉄のくさり、長いすのあしに、くくりつけてあることがわかりました。まるで動物園のクマのように、そのくさりののびるだけしか、動けないのです。

道化の仮面

「きみ、きみ、ぼくはお手洗いにいきたいんだ。このくさりを、はずしてくれたまえ。」

明智は、ドアをしめようとしている少女に、大きな声でよびかけました。

それを聞くと、少女は、しぶしぶもどつてきました。

「ほんとうですか。ほんとうに、お手洗いにいらつしやるのですか。」

「ほんとうです。どうか、くさりをといてください。」

それをきくと、少女は明智の足もとにうずくまり、ポケットから小さなかぎをだして、足くびの鉄の輪をパチンとはずしてくれました。

ドアのそのの廊下にある手洗い所へいって、そこから出ますと、明智はニコニコして、
いうのでした。

「これで、ぼくは自由の身になったわけだね。逃げようと思えば逃げられるね。」

すると、少女は、びつくりして、いきなり服のうしろから小さいピストルを取りだし、
明智にねらいをさだめました。

「逃げてはいけません。どうしたって、逃げられないのです。どうか、逃げないでください。」

い。おねがいです。」

少女は、かなしそうな顔で、ほんとうに、たのんでいるのです。明智は、にわかに笑いだして、

「じょうだんだよ、じょうだんだよ。逃げたりなんかするものか。」

と、安心させておいて、少女がゆだんするのをみすまして、あいてにとびつき、そのピストルをうばいとつてしまいました。

「あつ、いけません。あなたは、なにもごぞんじないのです。いけません、いけません……」

と、とりすぎる少女をふりはらつて、走つていこうとしますと、とつぜん、明智の背中に、コツンと、かたいものがあたりました。

「手をあげろ。ピストルをなげろ。でないと、きみの背中にあながあくぞ。」

背中のかたいものは、ピストルのつつ口でした。そして、ふたりのふくめんの男が、そこに立っていたのです。

明智探偵は、もとの部屋につれもどされ、こんどは長いすではなくて、ふつうのいすに、なわでぐるぐるまきに、しぼりつけられてしまいました。

「ハハハハ……、おとなしくしていれば、足の鉄の輪でよかつたのだが、つまらないまねをするもんだから、身動きもできなくなってしまうた。ざまあみるがいい。」

ふたりの男は、にくにくしげに、いいすてて、少女といっしょに外へ出ていってしまった。そして、ドアにはパチンとかぎがかけられたのです。

明智探偵はいすにしばらくつけられたまま、しばらくは、ジツとしていました。

なかなか、てごわいあいてです。少女ひとりと思つてゆだんしたのが、いけなかつたのです。

「それに、この部屋は、どうもへんだ。」

だいいち、窓というものが一つもありません。それに、まるで高い塔のてっぺんにでもいるように、部屋ぜんたいがフワフワとたえず、ゆれているのです。

「いや、それだけじゃない。この部屋には、なにか、しかけがしてあるような気がする。さつき目をさましたら、すぐに少女がはいつてきたのも、ふしぎだ。どこかから、だれかが、のぞいているのかもしれない。」

明智探偵はそう思つて、しばらくたまたま、ぐるつと部屋の中を見まわしました。

壁にはいろいろな油絵や、南洋の土人のつくつたお面や、おかしな道化師のお面などが

かけてあります。

明智探偵は、その壁を、あちこちとながめていましたが、やがて、その目は道化師の面の上に、ぴたりと、とまってしまいました。

壁のようにおしろいをぬった顔、まっかな、まんまるい鼻、両方のほっぺたに、あかい日の丸、糸のようにはそい目の、上下のまぶたに、たてに黒い線がかいてある。そして、白赤だんだらのとんがり帽子をかぶった西洋道化師の土でできたお面です。

明智探偵は、そのお面を、なぜか、あなのあくほど見つめているのです。

探偵の目とお面の目とが、まっ正面にむきあつて、まるで、にらめっこでもしているようにみえました。

しばらく、そうしているうちに、明智探偵の顔がニコニコと笑いの表情になりました。すると、ああ、ごらんさい。壁にかけてある道化師のお面もニヤツと笑ったではありませんか。

「アハハハ……、おい、その、ピエロ君。きみは生きた人間だね。壁のあなから顔を出して、お面のようになせかけているんだね。そうして、ぼくを見はっているんだろう。」
明智に見やぶられて、壁のお面がかつと目を見ひらき、口をうごかして答えました。

「やっと、わかったね。だが、名探偵明智小五郎にしては、ちと、おそすぎたよ。」

その壁には、もともと、土でできた道化師のお面がかけてあったのですが、悪者は、じぶんの顔に、そのお面とおなじけししようをして、ときどき壁のあなからお面をひっこめ、そのあとへ自分の顔をつきだして、明智のようすを見はつていたのです。

「しかし、そんなことをしては、きみもくたびれるだろう。どうだ、こちらへ、はいってこないか。」

明智が、まるで、友だちにでもいうように話しかけました。

「そりゃ、くたびれるがね。だが、いくらくたびれたって、きみのさしずはうけないよ。」
道化仮面が、あつい、まっかなくちびるを動かして答えます。

「いや、じつは、きみにたのみがあるんだよ。」

「たのみ？　ずうずうしいやつだな。まあ、いつてみるがいい。どんなたのみだ。」

「タバコがすいたいんだ。」

「フン、タバコがすいたいから、なわをとけというのか。そうはいかない。」

「いや、なわはとかなくてもいい。ぼくのポケットのシガレットケースから、タバコを一本だして、ぼくの口にくわえさせ、火をつけてくれればいいんだ。まる一日タバコをすっ

ていないので、食事よりなにより、まずタバコがほしいのだよ。」

「アハハハ……、そうか。おれもタバコずきだから、その気持はわかるよ。よし、それじゃ、そこへいって、タバコをすわせてやろう。」

そういったかとおもうと、道化仮面がひっこんで、そのあとへ、ほんとうの土のお面が
いれかわりました。

名探偵の冒険

やがて、ドアがひらき、顔だけ道化師で、からだはぴったり身についた黒シャツと黒ズボンの男が、部屋にはいつてきました。

「シガレットケースは、どこにはいつているのだ。」

「ここだよ。右の内ポケットだよ。」

男が探偵の胸に手をいれてケースを取りだすと、パチンと、それをひらきました。

「なんだ、一本しかないじゃないか。」

「一本でもいいよ。ともかく、すわせてくれ。」

「さあ、それじゃ、これをくわえるがいい。ライターをつけてやるからな。道化仮面の男が、一本のタバコをくわえさせ、火をつけてくれました。」

「まあ、ゆつくりやりたまえ。おれもあつちで、ひとやすみするからな。」

道化仮面はそういつて、外へでていきました。

あとにのこった明智探偵はいすにしばらくつけられたまま、さもうまそうに、タバコをすいながら、壁の道化師の面をジツと見つめました。

土でできたお面です。まだ人間の顔とは、いれかわっていないのです。

いつまでたつても、いれかわるようがありません。道化仮面の男は、ほんとうに、ひとやすみしているのでしょうか。

明智探偵はタバコをくわえたままニヤリと笑い、スパスパとおおいそぎで、タバコをすいできました。なにかわけがありそうです。

タバコが、くちびるのそばまで、もえていきました。ふしぎなことに、もえた灰はパラパラとおちますが、タバコの長さはすこしもかわらないのです。しかも、もえたあとが、銀色にピカピカひかっているではありませんか。

明智探偵は、タバコをくわえたまま、グツとうつぶむいて、胸をしばってあるなわに、タ

バコの銀色のところを近づけました。

タバコの火で、なわを焼ききるつもりでしょうか。それはだめです。新しいあさなわですから、とてもタバコの火をつけることはできません。

明智は、タバコの火のところを、そのあさなわに、こすりつけて消してしまいました。すると、あとには銀色の細いナイフの刃のようなものが残りました。

明智はその刃でゴシゴシと、あさなわをこすりはじめたのです。

ナイフの刃には柄えがついていて、その柄を歯でぐつとかみしめ、顔ぜんたいを上下に動かして、あさなわをこするのです。

タバコの中に、ほそいナイフがかくしてあったのです。それを一本だけ、シガレットケースに入れておいて、悪者に、そのタバコを口にくわえさせてもらったのです。

悪者のほうでは、明智がほんとうにタバコがすいたのだと思って、べつにうたがいません、それをくわえさせて火をつけてやりました。

ああ、なんという、うまい考えでしょう。このナイフ入りのタバコをもっていけば、いくらしぼられても、平気です。それで胸のなわを一本だけきってしまえば、あとは、なんなく、なわをとくことができますからです。

二分間ほど、ゴシゴシやっていますと、なわがプツリきれました。それから、からだをゆり動かすと、いくえにもまいたなわが、だんだんとけていって、とうとう手も足も自由になりました。

いすをはなれて、そつとドアに近寄り、そのように耳をすましたうえで、しずかにひらきました。だれもないようです。廊下に出ました。まっすぐに、すすんでいきます。廊下のつきあたりに、せまい階段がありました。足音をしのばせて、それをのぼると、ドアにつきあたりました。また耳をすましてから、そつとそれをひらきました。外はまっくらです。そして、ふしぎなことに、海のおいがしました。

「おーい、にげたぞーっ。明智探偵がなわをきつて、にげたぞーっ。」
どこからか、さげび声が聞こえてきました。

明智は、まっくらな中をかけたしました。足もとがユラユラとゆれているような気がします。

うしろから、パン、パンと、ピストルの音がしました。おどかしに、わぎとねらいをはずしてうったのでしよう。

明智探偵は、むちゆうになつて走りしました。十メートルほどいくと、なにか、かたいも

のにぶつかりました。階段のてすりのようなものです。

「ワハハハハ……、おどろいたか、明智先生。ここをどこだと思っっているんだ。きみはおよぎができるのか。いやさ、この広い海がおよぎきれるとでもいうのか。」

道化仮面の声です。はっとして、てすりの下をのぞくと、星あかりに、それとわかる水、水。まっ黒にうねる、はてしもしらぬ広い海です。

ああ、ここは船の上だったのです。どこもしれぬ広い海をすすんでいる汽船の上だったのです。さっきの部屋に窓のなかったのも、ユラユラゆれているように感じたのも、そのためでした。

まさか汽船の上とは、気がつきませんでした。ゆうべ自動車の中で、ねむらされてから、東京港で汽船にのせられ、その汽船がこの広い海へすすんで来たのでしよう。

じぶんで「恐怖王」となっている怪盗は、こんな大きな汽船までもっているのです。よほど大じかけな盗賊団にちがいありません。その首領の「恐怖王」とは、いったいどんなやつでしょう。もしかしたら、さつき、船室の壁から顔を出していた道化仮面の男が、その「恐怖王」なのではないでしょうか。

明智探偵は盗賊のために、汽船の甲板かんばんのてすりまで追いつめられたのです。もう海へ

とびこむほかに逃げみちはありません。

探偵は水泳はよくできました。しかし、この広い海へとびこんで、陸地までおよぎくなんて、とてもできることはありません。さすがの名探偵も、ぜったいぜつめいです。

明智は、とつさに、いそがしく頭をはたらかせました。こういうときこそ、おちつかなければいけない。そして、うまい知恵をしばらくささなければならぬ。

「ワハハハ……、どうだ、明智先生、この海がおよげるかね。ワハハハハ……。」
道化仮面の声が、近づいてきました。

そのとき、明智の頭にチラツと名案がうかんだのです。

「このくらの海が、およげないで、どうするものかっ。」

そうさけんにおいて、足もとにころがつていた小さなたるを、海の中へけるがはやいか、てすりをのりこし、さかさまになって、海へとびこんだように見せかけました。

そのとき、海面におちたたるがポチャーンと、まるで人間がとびこんだような水音をたてました。

しかし、とびこんだのはたるばかりで、明智探偵は船のふなべりにぶらさがって、身をかくしていました。いのちがけの、はなれわざです。

「やつ、とびこんだぞ。ボートを出せ、ボートを出せ。」

道化仮面のわめき声が聞こえ、二―三人が船のトモ（うしろ）のほうへ走っていく足音。汽船のトモに、ふつうのボートが一そうつないであり、盗賊たちはそのボートをたぐりよせ、なわばしごとをつたって、それにのりこむとオールをあやつって、そのへんの海面をしきりにさがしはじめました。

明智探偵はふなべりからぶらさがっているのですが、黒い服をきているので、遠くからは気がつきません。そのまま、はんたいがわへ、こぎさっていきました。もうだいじょうぶです。明智はふなべりをはいあがって、まっくらな甲板に身をふせました。

そこに、なにかの箱がおいてあったので、その箱のかげにかくれてじっとしていました。すると、コトコトと、甲板を歩いてくる足音が聞こえます。むろん船の上には、まだ賊のなかまが残っているはずです。そいつが海をこぎまわっているボートを見るために、やって来たのかもしれない。

箱のかげの明智は、あいてのやつて来るはんたいがわにまわって、そこにねそべってじつと息をこらしていました。

「おーい、明智はみつかったかあ……。」

おやつ、聞きおぼえのある声です。もしかしたらと、そつと箱のかけから顔を出してのぞいてみますと、そいつは道化仮面のあの男でした。どうも、こいつが首領らしいのです。首領とすれば鉄仮面にばけたやつ、そして「恐怖王」となる、あの悪人にちがいはありません。

明智探偵は、じつと、そいつのうしろ姿を見つめました。右手にピストルをにぎっています。星あかりに、それがぼんやりと見えるのです。

「かしらあ……、どこへ、もぐつちやったのか、どうしても、みつきりませんよう……。」
下のボードからさげんでいるのが聞こえました。

「そんなはずはないぞう……。船のそこに、くつついているかもしれんから、船のまわりを、ぐるつと、まわってみよう……。。」

道化仮面が、さげびかえました。

そのときです。

明智探偵は、箱のかけから、ぱつと、とびだして、道化仮面にぶつかっていきました。そして、まずピストルを、たたきおとしてしまったのです。

「やつ、きさま、だれだつ……。」

道化仮面は、いきなりくみついてきました。そして、ふたりは、とっくみあつたまま、まっくらな甲板の上に、ころがつてしまいました。

名探偵の変装

それから、大格闘がはじまったのです。上になり、下になり、ふたりは、まっくらな甲板の上をゴロゴロと、ころがりまわっていましたが、とうとう明智が上になり、道化仮面はくみしかれたまま動かなくなつてしまいました。明智は柔道の手で、あいてののどをしめ、きぜつさせてしまったのです。

あたりを見まわしましたが、甲板には人かげもありません。ふたりは、だまつたとっくみあつていたので、船室にいる部下たちはなにも知らないのです。

明智探偵は、ぐったりとなつた道化仮面のからだを、甲板のものかげへひっばつていて、じぶんの服をぬいで、あいてにきせ、あいての道化仮面をはずして、じぶんの顔にかぶり、とんがり帽子もとつて、じぶんの頭にかぶりましました。

人間のいれかわりです。ぐったりとたおれているのが明智探偵で、立っているのが道化

仮面の恐怖王としか思われません。

明智探偵は、なにか冒険をやらなければならぬようなときには、ワイシャツの下に、びったり身についた黒シャツと黒のズボン下をつけて出ることにしていました。きょうも、それを着ていたので、仮面さえつけて、服やワイシャツをぬぎさえすれば、賊の首領になりすますことができるのでした。

それから、ながいなわをもつてきて、首領の手足をぐるぐるまきにしばり、さるぐつわをはめたうえで、首領のからだの急所をぐつとついて、息をふきかえさせました。

息をふきかえしても、賊は手足をしばられているうえに、さるぐつわをはめられているので、どうすることもできません。

明智は、そのへんにまるめてあったズツクのきれをひろげて、首領のからだにかぶせました。そして、じぶんは甲板におちていた、さっきのピストルをひろいとると、賊の首領になりすまして、船室へはいつてくるのでした。

そして、いちばんりっぱな部屋へはいつていき、あたりを見まわして、つくえの上のよびりんのボタンをおしました。

すると、ひとりの部下があらわれ、

「かしら、なにかごようで……。」「
と、たずねました。」

「うん、おまえは知っているだろう。れいの『星の宝冠』を、おれがどこへしまったか、
いってみろ。」

明智は賊の首領のドラ声をまねて、わぎとらんぼうにいいました。

「へっ、かしらは、じぶんで、しまっておいて、忘れちゃったんですかい。」

部下は、へんな顔をして、聞きかえします。

「いや、おれはむろん知っているよ。だが、おまえが知っているかどうか、ためしてみる
んだ。さあ、どこだ。いってみろ。」

「きまつてるじゃありませんか。いつも、かしらが、いちばんだいじなものをしまつてお
く、その戸柵とだなですよ。」

「うん、そうか、ここだな。だが、かぎがかかっている。おまえはかぎがどこにあるか知
っているか。」

「つくえのひきだしですよ。右がわのいちばん上のひきだしの、手帳の間にはさんである
のを、かしらは忘れたんですかい。」

「忘れるもんか。ちよつと、おまえを、ためしてみたんだよ。よしつ、それじゃあ、もう用はない。あつちへいってよろしい。」

部下の男は、そのまま、ひきさがっていきました。道化仮面をかぶって、首領とそっくりのかつこうをしているので、これが明智探偵の変装だなどは、うたがってさえみなかったのです。

明智はそのかぎをだして、戸棚をひらき、紫むらさきのふろしきにつつんだ「星の宝冠」の箱を取りだし、それをひらいて中をあらためました。

キラキラと星のようにきらめく、無数の宝石をちりばめた黄金の宝冠です。さすがの名探偵も、そのうつくしさに、しばらくは、ぼんやりと見とれているばかりでした。

明智はそれをもとどおりにつつんで、こわきにかかえると、また後部甲板へとびだしていきました。とちゆうで、部下たちの船室の窓の前をとおりましたが、だれも首領をうたがうものはありません。

甲板のはずれにたつて、まっくらな海を見おろしますと、ちようどボートが汽船をひとまわりして、帰ってきたところでした。明智は道化仮面の顔を、ふなべりからつき出すようにして、ボートの部下たちに見せました。

「かしらあ、だめですよ。いくらさがしても、なんにもいませんよう。明智のやつ、サメにでも、くわれちやっただんでしよう。」

ボートから、部下のさけぶ声が聞こえてきました。

「よろしい。それじゃあ、もうさがすのをやめて、あがってこい。」

明智は首領の声をまねて、命令しました。

すると、三人の部下はボートを船尾からさがっている綱つなにくくりつけて、なわばしごをつたって甲板へあがってきました。

「やあ、ごくろう。部屋にはいつて、いつぱいやるがいい。……明智先生、とうとうおだぶつとはいいきみだ。これでもう、じやまものが、なくなってしまったから安心して仕事ができるというもんだ。」

明智はあくまで賊の首領になりすまして、ふてぶてしく、こんなことをつぶやいてみせるのでした。

部下たちが船室へはいってしまおうと、明智は、きつき、かれらがあがって来た、なわばしごをつたって、下のボートへとおりていきました。

名探偵はこうして、まんまと、目的をはたしたのです。敵にとらわれの身となりながら、

賊の首領だけをそつとたおして、首領になりすまし、有馬さんの「星の宝冠」をとりもどして、ボートにのりうつることができたのです。

ボートにのりうつると、綱をといて、まつくらな海の上を、東京の方角にむかってこぎはじめました。さいわい、波はありません。大きなうねりが、のたりのたりと、うつてくるばかりです。

大きなオールを、ひとりで二本あやつるのはむずかしいので、明智はくふうをして、一本のオールを和船わせんのろのようにつかって、ボートをこぎました。

みるみる、汽船との間がへだたつていきます。

二百メートル、三百メートル、そして、五百メートルもへだたつたころには、大きな汽船の姿さえ夜のやみにとけこんで、はつきりとは見えなくなつてしまいました。

まけた恐怖王

そのとき、汽船では、大きなおこっていました。

首領の姿がどこにも見えないのです。船じゅうさがしまわっても、どうしてもみつかり

ません。

もしやと思つて明智探偵をしばりつけておいた部屋へいつてみるとなわがバラバラに
けて、もちろん明智の姿はかげも形ありません。

いよいよたいへんです。

首領も、どつかへ消えうせてしまったのです。

手わけをして、もういちど船の中をさがしまわりました。

ひとりの部下が懐中電灯をてらして、後部甲板をあちこちと歩きまわっていました。
すると、どこかで、コトコト、と音がするのです。

「だれだつ……。」

と、どなつてみても、なんの答えもなく、ただコトコトとおなじ音がつづくばかりです。

「へんだぞ。」とおもいました。じつと耳をすまして、音のする方角を聞きさだめてお
いて、そこを懐中電灯でてらしてみました。

ズツクのきれが動いています。その下に、なにか生きものが、かくれているのかもしれ
ません。

部下の男は、こわごわ、そばに近づくと、ズツクをつかんで、ぱつと、はねのけました。

「やつ、明智だなっ……。」

そこには、黒い背広をきた男が手足をしばられて、ころがっていました。部下はそれを見て、てつきり明智探偵と思いきんだのです。さるぐつわで口のへんをしばられているのですし、服が明智の背広ですから、ひとめ見て、明智と思つたのはむりありません。

その部下は、いきなり船室のほうへかけだして行って、みんなをよびましたので、たちまち六―七人の部下のものが集まってきました。

「どうした、どうした。」

「なに、明智のやろうが、しばられているって？」

「すると、かしらが明智をしばったのかな。」

くちぐちに、そんなことをいいながら、たおれている男に近づきました。

「おやつ、これは明智じゃないよ、明智は、もっとモジャモジャの頭をしていたはずだぜ。」

「なんだとう。これが明智でなけりや、いったい、だれだっというんだ。」

「それが、わからねえんだよ。へんだなあ。」

そのとき、たおれていた男が、くくられた両足を高くあげて、ドカンと床板をたたきつ

けました。かんしやくをおこしているようです。

「もうすこし、顔をよく見てやろうじゃねえか。これをとってね。」

ひとりの部下が近よって、男のさるぐつわのきれを、とりはずしました。

おお、その下から、あらわれた顔は！

「ひゃあつ、かしらだつ。かしらだぜ、こりやあ。」

「はやく、なわをとかねえか。みんな、なにをぐずぐずしてやがるんだ。」

てれかくしのように、そんなことをいいながら、部下たちは、首領のなわを、ときほどききました。

「ばかやろう。なんてドジなやろうどもだつ。明智のやつは、おれの道化仮面をかぶって、おれとそっくりの姿になって、どっかにかくれているんだ。手わけをして、あいつをさがしだせつ。」

「ところが、かしら、船の中は、もうすつかり、さがしちやったんです。しかし、あいつの姿はどこにもありませんよ。」

「おやっ、おかしいぞつ。」

部下のひとりが、とんきような声をたてました。

「かしら、かしら。かしらはさつき、甲板から、ボートにのっているおれたちに、もういいから、あがってこいって、よびかけましたかい。」

「そんなこといやあしない。それは、おれじゃあないよ。」

「するってえと、あれが明智だったかな。たしかに、道化仮面をかぶってましたよ。」

「いや、まてまて。かしら、たいへんなことになりましたぜ。」

またべつの部下が、いきせききつて、いうのです。

「なんだ、なにがたいへんだ。」

「かしらは、さつき、かしらの部屋へおれをよんで、『星の宝冠』はどこにはいつているかって、聞きやあしないでしょうね。」

「そんなときくもんか。おれは『星の宝冠』をしまったところを忘れやしねえ。」

「あつ、それじゃあ、あいつだ。あれが明智のやろうだったんだ。」

「おいつ、なにをいつているんだ。明智にそんなこと聞かれたのかつ。」

「へえ、あれが、まさか明智だとは知らねえもんだから、かしらは、へんなことを聞きなさると思つてね。」

「き、きさまつ、それじゃあ、もしや……。」

「かしら、すみません。『星の宝冠』は、あいつが持っていったんです。」

「おれにばけた明智のやろうがか？」

「へえ。」

ピシャン……首領の平手ひらてが、その部下のほおにとびました。まぬけな部下はほおをおさえて、うしろへひきさがります。

「さあ、みんな、明智をさがせ。どつかにかくれているはずだ。せつかくぬすんだ『星の宝冠』を取りかえされたんじやあ、おれの顔がたたねえ。どんなことがあっても、明智のやろうを、つかまえなけりやあ……。」

それから、また、船の中の大搜索だいそうさくがはじまりました。

しばらくすると、さつきボートにのった三人の部下は、なにかコソコソささやきながら、後部甲板のはずれのほうへやって来ました。

「おい、のぞいてみろよ。ひよつとしたら、あのボートで。」

「うん、おれも、そんなことじゃないかとおもうんだ。」

三人はてすりにもたれて、まっくらな海をのぞきました。

「あつ、ないよ。ボートがなくなっている。」

なわをひくと、ズルズルとあがってきます。そのさきにくくりつけてあったボートはかげも形もないのです。

三人は首領にこれを知らせるために、船室へ走りこみました。

「なにつ、ボートがなくなつたつて。」

首領もかけだしてきました。おおぜいの部下が、そのあとにつづきます。そして、みんなが後部甲板のてすりにもたれて、くらい海を見おろすのでした。

もし、ひるまなら、まだ明智のつたボートが見えていたのかもしれませんが、このくらさでは、どうすることもできません。

首領は船を東京のほうへすすませて、ボートをさがしましたが、ついに明智探偵を発見することはできませんでした。東京に近づきすぎては、こっちの身の上があぶないので、思うぞんぶんに、さがしまわることができなかつたからです。

それから一週間ほどたつたある日のことです。明智探偵事務所へ、みような電話がかかってきました。

明智が電話口に出ますと、いきなり、ウフフフフ……という、きみのわるい笑い声が聞こえてきました。

「ウフフフ……、明智先生かね。おれは恐怖王といわれているどろぼうだ。このあいだは明智先生のおうでまえを、つくづく見せてもらったね。あれはおれのまけだった。たしかにまけたよ。だが、おれは、まけつきりではすまさない。このしかえしは、きつとしてみせる。先生、ようじんするがいいぜ。おれはまだ恐怖王のほんとうのおそろしきを見せていないのだ。ゆだんをしたら、とんでもないことになるぜ。」

だが、『星の宝冠』はもうあきらめた。やりそこなったら、すっぱりあきらめて、ほかの、もつと大きなえものをねらうのが、おれのやりかただ。そこで、こんどは、おれがなにをねらうとおもうね。ウフフフ……、いくら名探偵の明智先生でも、こればかりはあてられまい。世間をあつといわせてみせるよ。いや、世間よりも明智先生をあつといわせたね。こんどは道化仮面のようなやさしいものじゃないぜ。おそろしい仮面だ。東京じゆうが、ふるえあがるような恐怖の仮面だ。」

それをきくと、明智探偵は笑いました。

「ハハハハ、電話で挑戦というわけだね。よろしい。いつでも挑戦におうずるよ。このあいだの汽船では、きみの部下がおおぜいいたので、『星の宝冠』を取りもどすだけでがまんしたが、こんどこそ、きみをとらえてみせるぞ。きみこそ、ようじんするがいい。」

「ウフフフフ……、おもしろくなってきたね。明智大探偵対仮面の恐怖王か。巨人対怪人というやつだね。それじゃ、そのときまで、明智先生、からだをだいじにしたまえ。じゃあ、あばよ。」

そして、プツンと電話がきました。

黄金仮面

それから一月ほどは、なにごともなく過ぎさりました。そして、ある日のことです。京都市の三十三間堂げんどうに、ふしぎな事件がおこりました。

三十三間堂の細長いお堂の中には、おまいりの人の通路を残してお堂いっぱい、ピカピカひかる金色の、人間とおなじぐらいの大きさの仏像が何百というほど、びっしりならんでいます。

その夕方、小学校六年生のふたりの少年、高橋君たかはしと丸山君まるやまとが、お堂の中の通路を歩いていました。もう、うすぐらくなっているので、おまいりの人もみんな帰ってしまい、ガランとしたお堂の中には、ふたりの少年のほかには人の姿もないのでした。

しかし、人間はいなくても、人間とおなじ大きさの金色の仏像が、いくえにも、かさなりあつて、かぞえきれないほど立ちならんでいるのです。

その何百という金色の仏像が、だまりこんで、身動きもしないで、夕やみの中にむらがつているようすは、なんともいえないぶきみさです。

「もう、帰ろうよ。だれもいなくなつてしまつたじゃないか。」

丸山君が、心ぼそそうにいました。

すると高橋君は、ふつと立ちどまつて、びつくりしたような顔で、むらがる仏像のまんなかへんを見つめました。

「高橋君、どうしたの？　なにをそんなに見つめているんだい？」

丸山君が聞きますと、高橋君は、シートというように口の前に指を立てて、目で、そのほうを、さししめしました。

丸山君は高橋君の目を追つて、仏像のむれの中を見ました。

おやつ！　これはどうしたのでしょうか。ウジャウジャ集まつている仏像のまんなかに、一つだけ、まったくちがつたすがたの仏像が立っているではありませんか。

それは、ほかの仏像よりもからだが大いので、よく見れば、すぐわかるのですが、頭

にはインド人のターバンのような金色の布ぬのをまきつけ、金色のダブダブのマントのようなものを着ています。顔はむろん金色ですが、ほかの仏像より大きな顔で、お能のうの面のよう
に、うすきみがわるいのです。

気のせいか、そのへんな仏像は、黄金の顔で、じつとこちらを見かえしているようです。二少年はその仏像と、長い間にらめっこをしていました。

すると、ゾーツとするようなことがおこったのです。へんな仏像のからだはユラユラと動きました。そして、黄金の顔のくちびるがキューツと三日月形にめくれあがつて、ほそい黒いすきまができました。笑ったのです。黄金の顔が、ニヤニヤと笑ったのです。

二少年は、あまりのおそろしさに、からだはすくんだようになってしまいました。高橋君は勇気をだして、丸山君の手をひっぱって、へんな仏像の見えないところまで、つれていきました。そして耳に口をあてるようにして、ささやくのでした。

「あいつ、見たかい。仏像じゃないよ。生きているんだよ。身動きしたじゃないか。そして、ぼくらのほうを見て笑ったじゃないか。」

「うん、そうだよ。あやしいやつだねえ。おぼけかしら？」

「おぼけなんて、この世にいるはずないよ。あいつ、悪者にちがいないよ。金色の姿をし

て仏像の中にかくれて、なにか、わるだくみをしているんだよ。ぼくたち、ここから、のぞいていよう。あいつ、もつと動くかもしれないからね。」

二少年は、ものかげに身をかくして、そつと、のぞいて見ることにしました。

少年たちの考えは、あたりました。そのへんな仏像みたいなやつは、動きだしたのです。その怪人はむらがる仏像をかきわけて、おまいりの人の通路へ出て来ました。それで全身があらわれたのですが、金色のマントの下には、ぴったり身についた金色のシャツと、金色のズボンをはき、くつまで金色でした。

怪人は、通路のまんなかを、ゆうゆうと歩いていきます。二少年は遠くはなれて、そのあとをつけました。

「おい、あいつ、黄金仮面だよ。」

高橋君は、尾行をつづけながら、丸山君にささやきました。

「ぼく、いつか、『黄金仮面』という本を読んだことがある。その本についていた写真が、あいつと、そっくりだったよ。その黄金仮面は、フランスの大どろぼうのアルセーヌルパンがばけていたんだが、ルパンはもう死んじゃったから、あいつはルパンじゃないよ。きつと、むかしのルパンのまねをして、黄金仮面にばけているんだよ。」

ああ、黄金仮面。そのむかし、日本じゆうをふるえあがらせた、あの怪人黄金仮面が、もう一度あらわれたのです。そして、いま、目前をむこうへ歩いていくのです。

二少年は、なんだか、おそろしいゆめを見ているような気がしました。

お堂の入口には、番人がいるのですが、黄金仮面は平気な顔で、その前をとおりすぎました。

番人は、ギョツとして、立ちすくみ、あまりのことに口をきく力もありません。

怪人はお堂を出ると、一度も、ふりむかないで、ゆっくり歩いていましたが、二少年がついゆだんをしてそのうしろへ近づいたとき、ヒョイとこちらをふりかえりました。

そして笑ったのです。あのきみのわるい三日月形の口で、ニヤニヤと笑ったのです。

二少年は、そこに立ちすくんだまま、身動きもできません。まっさおになつて、あいての金色の顔を見つめているばかりです。

すると、みょうな、しわがれ声が聞こえてきました。黄金仮面が、ものをいったのです。「ウフフフ……、おい、きみたち、おれをつけてくるとは、なかなか、勇気があるねえ。だが、だめだよ。おれは人間じゃないんだからね。鳥のようにじゆうじぎいに、空がとべるんだからね。きみたちにはどうすることもできないよ。ウフフフフ……。」

そういったかとおもうと、怪人は、クルツと、むこうをむいて、サーツとかけだしました。金色のマントを、うしろになびかせて、まるで魔物のような早さで走ります。そして、あつとおもうまに、うすぐらい夕やみの中へ、姿を消してしまいました。

あいてが見えなくなると、二少年は、やっと正気をとりもどして、そのあとを追いました。すこしいくと、高さ三十メートルもあるような、大きなシイの木が立っていました。

見あげると、風もないのに、シイのこずえがユラユラと、ゆらいでいます。

「へんだねえ。あいつ、この木の上へ、のぼっていったんじゃないだろうか。」

高橋君がいました。

すると、そのとき、お堂のほうから、白いきものに、腰ごろもをつけた番人の若いぼうさんが、いきせききつてかけつけてきました。

「おい、きみたち、いまの金色のぼけものは、どこへいった。おまわりさんをよんで、とつかまえなけりやあ……。」

高橋君はシイの木のてっぺんをゆびさして、答えました。

「あれ、あんなに木がゆれているでしょう。あいつが、あそこへのぼったのかもしれない。」

ぼうさんは手をかざして、シイのこずえを見あげましたが、夕やみにつつまれているので、はつきりはわかりません。

そのときです。木のでっぺんが、ひとときわはげしくぎわめいたかと思うと、そこから空中に、サーツと金色のものが、とびだしたではありませんか。

ああ、あいつです。黄金仮面が、空をとんでいくのです。

怪人は、高い空中を、からだをよこにして、両手をまつすぐに前にのぼし、まるで水中を泳ぐような形で、とんでいきます。金色のマントが、ヒラヒラとはためいて、映画のスーパーマンと、そっくりです。金色のスーパーマンが夕やみの空を高く、高く、とんでいくのです。

二少年とぼうさんとは大きな口をあいて、あつげにとられて、それを見あげていましたが、黄金仮面はみるみる、遠ざかっていき、だんだん、そのすがたが小さくなり、ついには、一つの金色の星のようになって、そのままサーツと、夕やみの空に消えていってしまいました。

あくる日の新聞が、その怪事件を大きく書きたてたことは、いうまでもありません。

高橋、丸山の二少年は、学校でみんなにとりかこまれ、黄金仮面の話を、なんどとなく、

せがまれるのでした。

三日月の笑い

それから一週間ほどのち、舞台は東京にうつって、またしても、おそろしい事件が occurred しました。

ある夜、少年探偵団員の木下君きのしたと宮島君みやじまが、世田谷区せたがやのクイーンという小さな映画館の客席に、腰かけていました。

このふたりは小学校六年生で、まだ少年探偵団にはいったばかりでしたが、正式の団員ですから、むねには、とくいそうにB・Dバッジをつけていました。

なぜそんな小さな映画館にはいったかといいますが、そこには「むかしなつかしき、おもいで映画週間」というかんばんが出ていて、こんやは十年も前に大ひょうばんだった「黄金仮面」の古い映画が上映されていたからです。

あの京都の高橋少年が読んだという、ルパンのばけた「黄金仮面」の本が映画になったものです。ふたりの少年は、その本を読んでいましたけれど、映画は一度も見えていなかった

たので、クイーン映画館のかんばんを見ると、さつそく見物することにしたのです。

まず上野公園の博覧会にちんれつしてあった、何千という真珠の玉を集めてこしらえた、三十センチほどの小さい塔を黄金仮面がぬすみだすところから始まって、だんだん場面がすすんでいきましたが、ある場面で、黄金仮面の顔だけがスクリーンいっぱいに大うつしになりました。

ふつうの人間の何千倍もあるような、とほうもなく大きな顔です。しかもそれが金の顔で、お能の面のように、うすきみわるい形をしているのです。

その顔が口を三日月形にキューツとまげて、ニヤニヤと笑いました。口のところが三日月形の、ほそい穴になって、そのおくに歯や舌があるのでしようが、なにも見えず、まっ黒なのです。

そこでは音楽もやんでしまつて、なんの音も聞こえません。見物席はかたずをのんで、シーンと、しずまりかえっています。

そのしずけさをやぶつて見物席のすみから、キャーツという、ひめいがおこりました。女の人があまりのおそろしさに、おもわず、さけび声をたてたのです。

見物人たちは、その声にゾーツとふるえあがりましたが、てれかくしのよう、ほうぼ

うに笑い声とぎわめきがおこりました。見物人というものは、こわいときに笑うものです。つぎのしゅんかん、その笑い声がピタリと、とまってしまいました。画面におそろしいことがおこったからです。

黄金仮面がスクリーンいっぱいには笑っている、その三日月形の口の右のすみから、まっかな液体がタラタラとながれおちたのです。その映画はカラー映画でなくて、白黒の映画なのです。その色のない画面に、とつぜん、まっかな色の液体がながれたのです。

血です。

うすきみのわるい三日月形の口から、血がながれおちたのです。そして、その血だけが、まっかな色をしていたのです。

黄金仮面はまだ笑っています。声のない笑いを、笑っています。そして、その口から血をはいているのです。

カラー映画でなくても、フィルムの一枚一枚を虫めがねで見ながら、小さく色をぬれば、こんなふうに見えるかもしれませぬ。しかし、色が出したければカラー映画をとればいいのですから、いまだき、そんなてまのかかることをするはずがありません。

じじつ、その映画には色はまったくついていなかっただけです。それが、こんやにかぎつ

て、まっかな血がながれたのです。

見物人はギョツとして逃げごしになって、席から立ちあがりました。それより、もっとおどろいたのは映写技師です。

血を見るとびつくりして、機械をとめてしまったのです。そしてフィルムをはずして、よくしらべるために、そのあいだ場内の電灯をつけました。

スクリーンの大うつしがぼつと消えて、見物席があかるくなりました。

見物人のひとりひとりが、じぶんは気がちがったのではないかと思いました。あんなおそろしい映画があるはずはないからです。

ですから、スクリーンの画面が消えて、場内があかるくなったときには、ゆめからさめたような気持でした。

少年探偵団員の木下君と宮島君も見物席の前のほうで、この怪映画を見たのですが、これはなにか犯罪にかんけいがあるかもしれないと思ったので、こわさもわすれて、キョロキョロと場内を見まわすのでした。

そのときです。

見物席にワーツというような、どよめきがおこりました。そして、てんでに席を立って、

映画館の入口のほうへ逃げだそうとしました。

それもむりはありません。スクリーンの前の舞台のうえに、おそろしいことがおこっていたのです。

ああ、ごらんなさい。スクリーンの前に、なんともえたいの知れぬ怪物が、このこと、あらわれてきたではありませんか。

それは映画の中の黄金仮面とそっくりのやつでした。スクリーンからぬけだして実物になって、あらわれたとしかおもわれませんでした。

金色の顔、頭には金色のターバン、金色のマント、金色のズボン、金色のくつ。そいつがスクリーンの前にたちはだかつて、見物席を見おろしているのです。

映画館の人は客席のうしろから、それを見ると、あおくなつて、一一〇番へ電話をかけました。

すると、三分とたたないうちに近くをまわっていたパトロールカーがかけつけ、ふたりのおまわりさんが、映画館の中へとびこんできました。

それからのさわぎは、どう書いたらいいのか、わからないほどでした。

ふたりの警官は廊下をとおつて、舞台にかけあがりました。

それといきちがい、黄金仮面はヒラリと客席にとびおり、いすのあいだを入口のほうへ走ります。

まだ残っていた見物人たちは、黄金仮面につかまったらたいへんだと、身をよけて通り道をあけてやります。そのためにうしろにいた人たちがころんでしまい、こどものなき声、女の人たちのひめいで、なんともいえないさわぎです。

木下、宮島の二少年もその中にいましたが、いくら少年探偵団でも、この怪物にであっては、どうすることもできません。ただ、さわぎをながめているばかりです。

黄金仮面は客席をつつきると、おもてへは出ないで、二階の見物席への階段をかけのぼり、二階のおもてがわの窓をやぶって、ひさし屋根に出ました。

おもての道路は、逃げだした見物人たちと通りがかりの人たちで、いっぱいになり、自動車は何台も動けなくなっているのです。

黄金仮面はその群衆を見おろして、あの三日月形の口でニヤニヤと笑いました。そして、ひさし屋根の一方のすみまでいくと、そこにさがって来ている大屋根のはしに手をかけ、ヒラリととびのって、いまにもすべりおちそうな大屋根の上を金色のトカゲのように、はいあがっていくのです。

ふたりのおまわりさんは窓のそとに出て、ひさし屋根まで来ましたが、とても大屋根へはのぼれません。黄金仮面はかるわざ師のように身がかるいので、ふつうの人間に、そのまねができるはずはないのです。

それから、しばらくすると、映画館の前に集まって、屋根を見あげていた群衆の中から、ワーツという声がわきあがりました。

みんな、夜の空を見あげて、さけんでいるのです。大屋根よりも、もっと高い空を見ているのです。いったい、なにがおこったのでしょうか。

おお、またしても、空中飛行です。黄金仮面は金色のマントをひるがえして、夜の大空を、南をさして一直線にとんでいくのです。スーパーマンのように、とんでいくのです。

空には、かずしれぬ星が、またたいていました。その下を、星よりもうつくしくひかる黄金の鳥ちようじん人が、おそろしい早さでとんでいくのです。

そして、あれよあれよと見るまに、黄金仮面の姿は、たちまち小さくなり、またたく星の間にまぎれこんで見えなくなってしまうました。

黄金の魔術師

恐怖王は黄金仮面の怪物にばけて、映画館の屋上から星のきらめく大空へ、とびさつてしまいました。

そのまえに映画館のスクリーンに血をはく黄金仮面の顔が大写しになりました。白黒の映画に、仮面の三日月形の口からながれる血の色だけが、まっかにうつったのです。

あとでしらべてみますと、恐怖王は映画のフィルムをぬすみだして、その一こま一こまを虫めがねで見ながら、赤いえのぐをぬつて、また、もとの映写室へもどしておいたことがわかりました。赤いえのぐを一こまずつ、だんだんのぼして、ぬつておいたので、それを映写すると、タラタラと血がながれるように見えたのです。

それはわかりましたが、黄金仮面の恐怖王が、どうして鳥のように空をとぶのか、その秘密は、だれにもわかりません。あいつは魔法つかいなのでしょうか。

さて、映画館の事件があつてから一週間ほどたつて、目黒区めぐろの片桐さんかたぎりのおうちに、おそろしいことがおこりました。

片桐さんのおうちは、さびしいやしき町にある、ひろい西洋館でしたが、そこには一郎君とミヨ子ちゃんという、ふたりの子どもがいました。兄の一郎君は小学校六年生、妹の

ミヨ子ちゃんは小学校三年生でした。

あるばんのこと、ふたりが勉強部屋で、つくえをならべて本を読んでいますと、カーテンのひらいたガラス窓の外でチカツとひかったものがあります。本を読んでも目のすみで、それが見えたのです。

「あらっ、なんででしょう。」

「うん、へんだね。なんだか、ピカツとひかったね。」

しかし窓の外にはもうなにも見えませんので、ふたりは、また本を読みはじめました。しばらくすると、またしても、チカツとひかりました。一郎君はいすから立って窓のそばへいって、外をのぞいてみました。そこには、まっくらな、ひろい庭が、ひろがっているばかりで、なにもありません。そのとき、怪物は窓のすぐ下にうずくまっていたのですが、部屋の中からは、そこまで見えなかったのです。

また本を読んでいますと、三度めに、チカツとひかりました。そして、こんどは、もう消えないのです。ひかったものは窓の外にじっとしているのです。

ミヨ子ちゃんが、なんともいえないさけび声をたてて、一郎君にしがみついてきました。一郎君もいすから立って、おもわず逃げ腰になりました。

窓ガラスに顔をくつつけて、おそろしいものがのぞいていたのです。

それは金色にひかる、お能の面のような、きみのわるい顔でした。その顔が口をキューツと三日月形にひらいて、笑っているではありませんか。

一郎君は、このごろ新聞でさわがれている黄金仮面という怪物のことを、とつさに、思いました。

黄金仮面です。あいつにちがいありません。あいつが窓のそとに立っているのです。

「ワーツ……。」

一郎君は、おそろしいさけび声をたてて、ミヨ子ちゃんの手をひっぱって、廊下へかけだしました。そして、おとうさんの部屋へとびこんでいったのです。

「パパ、たいへんです。黄金仮面が……。」

「えっ、黄金仮面だって。」

「ぼくたちの勉強部屋の窓の外から、のぞいていたのです。はやく、警察へ……。」

おとうさんの片桐さんは、ふたりの書生をよんで、庭をしらべるようにめいじました。そして、じぶんは、電話のダイヤルを一一〇番にまわすのでした。

ふたりの書生は、懐中電灯と、木^{ほくとう}刀を持って、まっくらな庭へとびだしていきました。

庭には大きな木が、たくさんしげっています。ゆうかなな書生たちは、懐中電灯をてらして、木のしげみの間をさがしまわりました。

「あつ、あそこにいる。」

書生のひとりが小声でいって、そのほうへ懐中電灯の光をむけました。

すると、木のかげにかくれていた怪物が、ヌーツと、光の中へ全身をあらわしたではありませんか。

金色のターバン、金色の顔、金色のマント、金色のズボンとくつ。口が三日月形にキューツとひろがって、ニヤニヤと笑っているのです。

ふたりの書生はそれを見ると、タジタジと、あとずさりをしました。

「ウフフフ……、いいか、主人によくつたえるのだぞ。きょうから三日あと、十三日の午後十時きっかりに片桐家の宝ものをちようだいする。わかったかね。ここうちの美術室には国宝のぼさつ像がある。あれをちようだいするのだ。きつと約束はまもるからゆだんなく見はつていたまえ。」

黄金仮面は、それだけいってしまおうと、サツとむきをかえて庭のおくのほうへ走りだしました。

ふたりの書生は、あいてが逃げだすのを見ると、きゆうに元気になり、

「こらっ、まてっ、もう逃がさんぞっ。」

と、いきなり怪物のあとを追っかけました。

「あっ、へいにとびついたっ。」

そうです。黄金仮面は、高いコンクリートべいにとびついて、スルスルと、その上のぼりつき、一度、こちらをむいて、

「ワハハハハ……。」

と、あの三日月形の口で笑ったかと思うと、そのままへいのむこうへとびおりてしまいました。

書生たちは、そのあとを追って、へいにのぼりつこうとしましたが、たかくて、とてものぼれません。黄金仮面はかるわざ師のように身がかるいのですから、ふつうの人間に、そのまねはできないのです。

「ここでぐずぐずしてるより、門からまわったほうが、はやいよ。」

ひとりがそういって、かけだすと、もうひとりの書生も、そのあとにつづきました。

門を出ると、ちょうどそこへパトロールカーがやって来て、中からふたりのおまわりさ

んがとびおりました。

「あつ、警察のかたですか。黄金仮面はへいのそとへ逃げだしました。こちらです。はやく来てください。」

書生たちは、おまわりさんのさきにたつて、へいのそとの横町へかけつけました。

「このへんから、とびおりましたのです。まだ、遠くへいくはずはないのですが……。」
見ると、むこうのくらやみの中から、何者かがこちらへ近づいてきます。

書生のひとりが、ぱつと懐中電灯でそのものをてらしました。

腰のまがつた七十ぐらいのおじいさんです。カーキ色の、きたない服を着て、こわきにふろしきづつみをかかえ、杖にすがつてとぼとぼと歩いてきます。ながくのぼしたかみの毛がまつ白で、口やあごにも、ごましおの、ぶしようひげがのびています。

「おい、おじいさん、いま、金色のやつを見なかつたかね。このへいからとびおりましたんだが。」

書生がたずねますと、おじいさんは、やつこらしよと腰をのぼして、まぶしそうに、懐中電灯を見ながら、

「ああ、そいつなら、むこうへかけていったよ。頭から足のさきまで、金ぴかのやつだつ

た。」

と、うしろのほうを、さししめすのでした。

「ありがとう。じゃあ、あっちへ逃げたんだなつ。」

四人のものは、いちもくさんに、そのほうへかけだしていききました。

すると、おじいさんは、また杖にすがって歩きだしながら、

「ウフフフフ……。」

と、ひくい笑い声をもらすのでした。

なぜ笑うのでしょうか。なにがおかしいのでしょうか。ああ、ひよっとしたら……。

ふたりの警官とふたりの書生は、ずいぶんとおくまでさがしまわりましたが、黄金仮面の姿はどこにも見えませんでした。そこでとうとう、あきらめて、片桐さんの門のほうへひきかえました。

「へんだなあ。いくらあいつが足がはやくても、あの大通りに姿が見えないのは、おかしいな。あんなに、むこうまで見とおしなんだからなあ。」

書生のひとりがつぶやきますと、もうひとりが、はっとしたように立ちどまって、こんなことをいうのでした。

「あつ、そうだ。さっきのじいさんが、あやしいぞつ。黄金仮面は魔法つかいみたいなやつだから、ばけるのも、じょうずにちがいない。あいつ、さっきのじいさんに、ばけていたんじゃないかな。金色のマントやなんかは、あのふろしきにつつんで……。」

屋根裏の少年たち

それから三日め、黄金仮面が片桐さんの国宝の仏像をぬすんでみせると予告した十三日の午後のことです。

ここはこうじまち麴町の明智探偵事務所です。明智探偵は、たのまれた事件のために、福井県へでかけ、少年助手の小林君と、少女助手の花崎はなざきマユミさんとが、るす番をしていました。午後三時半ごろ、電話がかかってきたので、小林君が受話器をとりますと、それは明智探偵からでした。

「ぼくは、昼ごろ東京にかえた。ぼくがたのんでおいた男が新宿駅に待っていて、報告してくれたので、黄金仮面のゆくえがわかった。いま、それをたしかめたところだ。黄金仮面はきょう午後七時に、渋谷区しふやの一軒のあき家へやってくるのがわかった。そこで、

きみたち少年探偵団の手を、かりたいのだ。電話でよびだせるだけよび集めて、午後六時までに、そのあき家へきてくれたまえ。チンピラ別働隊も、なるべくたくさん、つれてくるのだ。わかったね。」

そして、その渋谷区のあき家への道じゆんを、くわしくおしえてくれました。

「マユミさん、先生からだ。黄金仮面のいるところがわかったんだって。」

「え、いつのまに帰っていらしたの。」

「きょうの昼ごろだつて。それから、いままでのあいだに、もう黄金仮面のゆくえを、つきとめておしまいになったんだよ。」

小林君は、まるで、じぶんがてがらをたてたように、じまんらしくいうのでした。

ふたりは新聞で黄金仮面の事件をよく知っていました。片桐さんの仏像をねらっていること、きょうがその約束の日であることなども知っています。

それから、小林君は、ほうぼうへ電話をかけて、少年団員をよび集めました。すると電話のある団員から電話のない団員や、チンピラ隊の少年に知らせ、たちまち十人の少年団員と七人のチンピラ別働隊員が集まり、午後五時にはみんな明智探偵事務所へやってきました。

小林少年は、マユミさんにするす番をたのんでおいて、その十七人の少年たちをつれて、都電と地下鉄で渋谷につき、おしえられたあき家へといそぐのでした。

そのあき家は渋谷駅から一キロほどの、さびしいやしき町の中になりました。少年たちは近くまでバスにのって、約束の六時には、ちゃんとあき家の門の前についていました。

それはレンガべいでかこまれた、木造三階だての洋館でした。なんだか、きみのわるいふるい建物です。

もう、あたりはうすぐらくなっていました。そのあき家の門の前に、黒い背広の明智探偵が待ちかまえていたのです。

「先生。」

といって、小林君がかけよりますと、明智探偵は、シツというように、口に指をあてて、目で見ているようにとあいずをして、門をくぐり、しき石道を歩いて、正面のドアをひらき、西洋館の中へはいっていききました。ドアにはかぎもかけてないようでした。

うちの中は、まっくらでした。電灯も、とめてあるとみえて、スイッチをさがして、おしてみても、あかりはつきません。

「懐中電灯を持ってきたらうね。」

明智探偵のことばに、小林君はすぐに、ポケットから万年筆型の懐中電灯をだして、スイッチをいれました。それをみならって、少年たちも、てんでに、万年筆型の懐中電灯をつけるのでした。この懐中電灯は少年探偵団の七つ道具のひとつなのでした。

「おおぜいが懐中電灯をつけたので、家の中は、にわかにあかるくなりました。
「感心、感心。みんな、七つ道具を忘れなかったね。」

明智探偵はそういつて、さきにたち、廊下を通って階段をのぼり、二階から三階へあがりしましたが、そこがおわりかと思うと、まだもうひとつ階段があるのでした。階段というよりは、はしごです。せまい、きゆうなはしごです。

そのはしごをのぼったところに、大きなあげぶたがついていて、それを、上におしあげると、ポツカリと黒い口がひらきました。その上は三階の屋根裏なのです。

「ぼくたち、この屋根裏に、かくれているんですか。」

小林君がききますと、明智探偵は、

「うん、そうだよ。」
と、答えました。

十七人の少年が、ぜんぶ、屋根裏にありました。

てんじようは屋根の形のままで、はしのほうは頭がつかえるほど、ひくくなっています。屋根をささえている材木が、そのまま、むきだしになっていて、いっぽうには、あかりとりの小さな窓がついています。

明智探偵は、少年たちを、おくのほうへすすませて、じぶんは入口のあげぶたのそばに立ちはだかっていましたが、そのとき、なにを思ったのか、クスクスと笑いました。

「ウフフフ……、おもしろいねえ。きみたちは、この屋根裏に、とじこめられてしまったんだよ。」

探偵が、みょうなことをいうのです。

なんだか、へんです。いったい、どうしたというのでしょうか。

「先生、なぜお笑いになるのです。なにがおかしいのです。」

小林君が、ふしぎそうに、たずねました。

「ウフフフ……、わからないかね。」

「えっ、わからないかって？」

「きみは、いま、おれを先生つてよんだね。なぜ、おれが先生なんだね。」

「いよいよ、へんです。それに、明智先生が、「おれ」なんていうのは、おかしいではあ

りませんか。

「ウフフフ、きみたち、うまくだまされたね。おれをだれだと思う。おれは変装の名人だよ。明智探偵にだって、だれにだって、ばけることができるんだ。」

もう声も明智先生の声ではありません。だれとも知れない、しわがれ声です。それでは、この人は明智先生ではないのでしょうか。すると、もしや……。

「ウフフフ……、へんな顔をしているね。やっとわかったかね。そうだよ。おれは明智探偵じゃない。あいつは、いまごろは、まだ福井県で、まごまごしているころだよ。」

「じゃあ、さっきの電話も……。」

「そうさ、あれも、おれが明智の声をまねた、にせ電話だよ。」

「えっ、それじゃあ、きみは……。」

「恐怖王というどろぼうだよ。このごろは黄金仮面ともよばれている。こん夜、片桐もっている国宝の仏像をぬすみだすので、ひよつとして、片桐が明智の事務所へ電話でもかけて、きみたちにじやまされるといけないので、こうして先手をうって、とじこめておくのだよ。ハハハハ、おれも、なかなか用心ぶかいだろう。じゃあ、きみたちは、ここで、ゆっくりやすんでいたまえ。……あばよ。」

そういったかとおもうと、明智にばけた怪人は、ヒラリと入口の下のはしごとびおり、バタンと、あげぶたをおろして、下からカチンと錠じょうをかけてしまいました。そのために、まえもつて、あげぶたに錠がとりつけてあったのです。

小林少年は、

「あつ。」

と、さげんで、あげぶたのところへかけつけ、両手でそれをあげようとしたが、びくとも動くものではありません。

「みんな、てつだつてくれ。この板戸をやぶるんだ。」

そこで、みんなが、あげぶたの板戸のまわりに集まって、たたいたり、けつたりして、それをやぶろうとしましたが、ひじょうにあつい板でできた、がんじょうな戸ですから、とても、やぶるみこみがないことがわかりました。

それに、たとえ、このあげぶたをやぶったとしても、あいては、どこかにかくれて、よすを見ているかもしれせん。それよりも、このままじつとしていて、あいてをあつとかわせるような、うまい計略はないものでしょうか。

小林君はうでぐみをして、じつと考えていましたが、しばらくすると、はつとなにかに

気づいたように、目をかがやかせました。

「あつ、いいことがある。みんな七つ道具はそろえているだろうね。黒い絹糸のなわばしごと、あれを腹にまいているはずだね。」

それをきくと、少年団員たちは、

「持っています。」

「持っています。」

と、口をそろえて答えました。

「よし、それじゃ、そのなわばしごとを三本もつなぎあわせれば、地面までとどくだろう。

みんなが、じゅんばんに、それをつたって、おりればいいんだ。あの窓からなわばしごとをさげるんだよ。」

「うん、そうだ。それがいいや……。」

みんなは、すぐに、さんせいしました。

「でも、いまずぐじやない。まだ、あいつが、どつかに、かくれているかもしれないから、すこし待ってからにしよう。」

小林君はそういって、窓に近づくと、ガラス戸をそっとひらいて、下をのぞいてみまし

た。

そこにはまだ夕やみのうすあかりが残っていますので、はるか下のほうに、地面がおぼろげに見えています。

草ぼうぼうの、ひろい庭です。

西洋館ですから、ちゅうとに屋根もなく、まっすぐにきりたった、おそろしい高さです。なわばしごとといっても、少年探偵団のは、絹糸をよりあわせた一本のひもで、三十センチごとにむすび玉ができていて、それを足の指にはさんでおりるのですから、まるでかるわざのような冒険です。

少年たちは、まっくらな中で、これから、その冒険をやらなければならないのです。

大格闘

少年探偵団のなわばしごは、小さい子がむやみにつかうとあぶないので、小林団長と中学生の団員だけが、いつも上着の下の腰にまきつけて、持ち歩いているのです。絹のひもですから、まとめると細くなつて、腰にまいても、外からはわからないのです。

そのとき、中学生の団員がふたりいましたので、小林団長のと、三つのなわばしごをつなぎあわせ、窓の外へたらしめて、それをつたって、つぎつぎと、みんなが地面におりるところになりました。

絹ひものはしについている鉄のかぎを、窓わくに、しつかり、くいこませ、さがったなわばしごをつたって、まず中学生の団員がさきにおりました。

絹ひもには三十センチごとに、大きなむすび玉ができていますので、それを足の指ではさみながら、おりるのです。ですから、みんな、くつしたをぬぎ、くつの中におしこんで、そのくつは腰にさげておりるのです。

それから、小学生の団員やチンピラ隊が、ひとりずつ、おりていき、もうひとりの中学生は、そのなかほどにはいつて、小さい団員をたすけながらおり、さいごに小林団長がおりました。

そのころは、もう、まっくらになっていましたから、へいのもとから見られるようなことはありません。恐怖王の部下も、庭を見はつてはいないらしく、十七人の少年たちは、ぶじに門の外へ出ることができました。

なわばしごは窓からさげたままで、残してきました。一本だけなら、下からひもをゆす

って、かぎをはずすことができるのですが、三本もつないであつては、とても、はずせません。おいしいけれども、なわばしごは残したままにしておきました。

少年たちは、それからすぐにバスにのつて、目黒の片桐さんのうちへいそぎました。恐怖王は今夜の十時に片桐さんの美術室から、国宝の仏像をぬすみだすといったのですから、少年探偵団は、そのじやまをしなければなりません。明智先生がするすなので、先生にかわつて怪人とたたかうのです。

みんなが、片桐さんのおうちのへいの外についたのは、もう八時半ごろでした。十時には、間があります。けれども恐怖王は、そのまえに片桐さんのうちへしのびこむかもしれません。

そこで少年たちは、ばらばらにわかれて、片桐さんのへいのまわりのやみの中に身をかくして、見はつていことにしました。

門の近くには、小林少年と中学生の団員ふたりとが、町かどや電柱のかげからじつと門のほうを見まもっていました。門の中には、ふたりの警官が、いったり、きたりしていません。

三十分あまりしんぼうしてみはつていきますと、警官が通りすぎるすきを待つていたよう

に、片桐さんの門の中から黒い影法師かげほうしが四人、ひとかたまりになって、いそぎ足に出てきました。

三人は、まっ黒なシャツとズボンのすがたで、その中に金色のやつが、ひとりいます。

「あつ、黄金仮面だつ。」

小林君は、おもわず、心の中でさげびました。

しかし、なんだか、へんです。金色のやつはけがでもしたのか、ぐったりして、三人の黒いやつによりかかり、三人は、三方から、それをだきかかえて歩いているのです。

四人が門を出たかとおもうと、そのうしろから、小さな、まっ黒なやつが、もうひとり、とびだしてきました。そして、四人のあとから、ついていくのです。なんだか、尾行しているような感じですよ。

「あつ、ポケット小僧だ。やつぱり、すばしこいな。」

小林君が、ひとりごとを、いいました。それはチンピラ隊のポケット小僧だったのです。ポケットにはいるほど小さいというので、そういうあだながついているのですが、じつにだいたんで、すばしっこい少年です。これまでもたびたび、少年探偵団のために、てがらをたてています。

小林団長は、そのポケット小僧ひとりだけ門の中にいれて、見はりをさせておいたのですが、それが、いま、あやしい四人のあとをつけているわけです。

黄金仮面の一団とポケット小僧が、むこうの、くらい町かどをまがったとき、門の中から、ふたりの警官がとびだしてきました。

今夜は黄金仮面の恐怖王がやってくるというので、片桐さんのうちには、三人の警官が見はり番をつとめていたのですが、その中のふたりが、怪人が逃げだしたのを知って追っかけてきたのです。

警官たちは、きよろきよると、あたりを見まわしましたが、もうそのへんには、あやしい人かげはありません。どうしようかと、ためらっているところへ、こちらの電柱のかけから、小林少年がとびだしていきました。

それを見ると、警官たちは、あやしいやつと、身がまえましたが、小林君は、つかつかと、そのそばに寄って警官たちになにかささやきました。

「うん、そうか。よし、どっちへ逃げた。」

「こっちですよ。」

小林少年はそういって、ふたりの警官のさきになつて、さつき、怪人の一団がきえた町

かどへいそぎました。

町かどをまがって、しばらくいきますと、せまい路地ろじの入口に、まっ黒な姿のポケット小僧が立っていました。そして、小林少年を見ると、すぐに、そばによってきて、耳に口をつけるようにして、なにごとかささやきました。

「この路地のおくに、一軒の、小さなあき家があるそうです。四人のやつはその中にはいつていったということですよ。」

小林君が説明しますと、ふたりの警官はうなずいて、

「よし、それじゃ、表とうらにわかれて両方から、そのあき家にふみこむことにする。きみたちはあぶないから、なるべく近寄らないがいい。」

警官はそういつて、ポケット小僧の案内で路地の中へかけこんでいきました。

小林少年は、路地の入口に立ったまま、ポケットからよびこの笛をとりだすと、ピリピリピリピリ……と、ふきならしました。少年探偵団員を、よび集めるためです。このよびこの笛も、探偵七つ道具の一つなのです。

だれかのよびこが聞こえたら、団員は、てんでに、じぶんのよびこをふきならして、みんなに知らせることになっていました。

小林君がよびこをふいたので、片桐さんのへいのそとに見はりをしていた団員たちが、つぎつぎとよびこをならす音が遠くから聞こえました。

そして、しばらくすると、小林君のまわりに、おおぜいの団員が集まってきました。

小林少年は団員たちに、ことのしだいを話してきかせ、二隊にわかれて、あき家の表口とうら口へ、おしかけることにしました。

そのときです。まっくらな路地の中から、ぱつと風のように、とびだしてきたものがあります。

「あつ。」とおもつて、よく見ますと、さっきの黒シャツの三人です。黄金仮面はどこへいったのか、すがたが見えません。

「おい、こいつらだよ。みんな、ひつつかまえるんだつ。」

小林君は、そうさけんで、三人のうちのひとりに、とびついていきました。

それをみると、十数名の団員たちも三人にとびかかり、くらやみの中の大格闘となりました。

あいては三人、こちらは十数人です。ひとりに四人か五人がくみついていくのですから、いくら子どもでも、ばかにはできません。

うしろからとびついて、首にぶらさがるもの、腕にからみつくもの、なかには、手首にくいつくものさえあります。

「あつ、いたいっ。ちくしょうめっ。」

力いっぱいふりはなして逃げようとすると、もうひとりの少年に足をすくわれて、ぱったりたおれるというありさま。

さすがに、力のつよい悪者たちも、さんざんなやまされましたが、こちらはまだ小さい小学生がおおいのですから、いつまでも悪者をひきとめる力はありません。ひとりずつなげとばされて、なかなか、おきあがれないでいるうちに、黒シャツの三人は、とうとう、やみの中へ逃げさつてしまいました。

それにしても、さつきの、ふたりの警官はどうしたのでしょうか。少年たちは、こんなに、たたかっているのに、たすけにこないのは、ふしぎです。

ああ、そうです。あき家には、まだ黄金仮面の恐怖王が残っているはずです。警官たちは、ふたりがかりで、黄金仮面とたたかっているのではないのでしょうか。

三人の悪者を取り逃がした少年たちは、がっかりして、路地の入口にうずくまっています。ころんだまま、おきあがれないものもいます。やっとおきあがって、おしりをさす

っているものもいます。でも、さいわいなことに、ひどいけがをしたものは、ひとりもありません。

そこへ、路地の中から、小さな、まつ黒なものがころがるように、とびだしてきました。ポケット小僧です。

ポケット小僧は、やみの中で小林団長の姿をさがすと、そのそばによって、なにかボソボソとささやきました。

「えっ、黄金仮面が……。」

小林君は、びっくりして、たちあがりしました。

「うん、そうだよ。だから、おまわりさんが、みんなに、くるようになって。」

それは、じつに、おどろくべき知らせでした。いったい黄金仮面が、どうしたというのでしょうか。

「よし、それじゃ、みんなで、いってみよう。」

小林団長は少年たちを集めて、路地の中へはいつていくのでした。

ああ、あき家の中には、なにが待っているのでしょうか。なにか、おそろしいことが、おこるのではないのでしょうか。それとも……。

午後十時

こちらは、片桐さんのおうちの美術室の中です。

主人の片桐さんと、ふたりの書生が、美術室のまん中にいすをおいて、それに腰かけ、部屋の中をじろじろと見まわしていました。いうまでもなく、恐怖王にねらわれている国宝の仏像をまもるためです。

片桐さんの子ども的一郎君とミヨ子ちゃんは、おかあさんといっしょに茶の間で、まだおきていました。背広をきた警官が、そのそばについています。ふたりの子どもが、恐怖王にさらわれるようなことがあつては、たいへんだからです。

この背広の警官は、ふたりの制服の警官が、黄金仮面の一団を追って門の外へ出ていったことは、気づかないでいました。ですから、美術室の三人も、そのことはすこしも知らなかったのです。

それにしても、約束の十時のまえに、黄金仮面や部下のものが片桐さんのうちから逃げだしたのは、なぜでしょう。これには、いったい、どんなわけがあったのでしょうか。

美術室の中では、片桐さんとふたりの書生が、しんぼうづよく見はりをつづけていました。

もう十時が近づいてきました。シーンとしずまりかえった部屋の中に棚の置き時計の音だけが、カチカチ、カチカチ聞こえています。その時計の針はりが十時十分前をさしました。カチカチ、カチカチ、時間は休みなく、すすんでいきます。

五分前です。……三分前です。

三人はいいあわせたように、むこうの壁かべぎわに立っている、おとなのからだほどの大きさの金色の仏像をみつめました。

国宝のぼさつ像です。奈良朝ならちようの傑作ということですが、まるで生きているように、よくできています。やさしくおだやかな顔、ふっくらしたからだ、それが金色に、こうごうしく、かがやいているのです。

恐怖王は、こんな大きな重い仏像を、どうしてぬすみだそうというのでしょうか。もう時間かんは一分しかありません。いま十時一分前なのです。

カチカチ、カチカチ、時間の秒をきざむ音は、休みなくすすみます。

三十秒前……二十秒前……十秒前。

そして、チン、チン、チン、チン……と、置き時計が十時をうちました。しかし、なにごともおこりません。恐怖王はどうとう、ぬすみだすことを、あきらめたのでしょうか。

三人は、まだ仏像を見つめたまま、ほっと安心のといきをもらしました。すると、そのときです。

三人が見つめている仏像の、金色の顔が、ニヤツと笑ったではありませんか。三人はゾーツとして、身動きもできなくなりました。たしかに、笑いました。千年もたった仏像が、生きてるように笑ったのです。

しかし、そんなことがあるはずはありません。目のまよいでしょう。まぼろしでしょう。でも三人がそろって、おなじまぼろしを見るなんてことがあるものでしょうか。すると、またもや、おそろしいことが、おこりました。

金色の仏像が、ユラユラ動いたのです。

「ワハハハ……。」

ああ、仏像が、おそろしい声で笑いだしたではありませんか。からだをゆすって、笑っているのです。

「ワハハハハ……、どうだ、おどろいたか。きみたちは、おれが、なににでも、ばけられることをわすれていたね。どうだ、この変装は、みごとだろう。まさか、おれが仏像にばけるとは、気がつかなかつただろうな。ハハハハ……。」

そういうながら、台の上からおりて、のっしのっしと、こちらへ歩いてくるのです。金色の仏像が、歩きだしたのです。

こちらの三人は、あまりのおそろしさに、口をきく力もありません。いすにこしかけたまま、ぼんやりと仏像を見つめているばかりです。

「どうだ、恐怖王のおてなみが、わかったか。おれが仏像にばけているからには、ほんとうの仏像は、とつくにぬすみだされているのだ。」

おれは、ゆうべ、こっそりしのびこんで、仏像をぬすみだし、庭のものおきの中にかくしておいた。そして今夜、おれの部下のものが庭にしのびこみ、ものおきの仏像をとりだして、はこびさってしまったのだ。

だが、約束は今夜の十時だから、それまでは、ここに仏像がなくてはならない。十時前に仏像が消えてしまったのでは、約束にそむくからな。おれは約束にそむくのが、だいきらいだ。

そこで、おれがこうして、仏像の身がわりになって、きみたちを、安心させておいたというわけだよ。

ハハハハ……、そして、十時ちようどに正体をあらわしたのだから、やつぱり、約束をまもったことになるんだ。仏像はいまのいままで、ちゃんと、ここに立っていたのだからね、ハハハ……。」「

怪人恐怖王は、もう、とくいのぜつちようです。仏像にばけて、みんなをだましたことが、ゆかいでたまらないのです。

こちらの三人が、もし勇気をだして、恐怖王にとびかかっていけば、ひとりに三人ですから、とらえることができたかもしれません。しかし、片桐さんも、書生たちも、仏像がおぼけのように動きだしたのに、びつくりしてしまって、とても、そんな元気はありません。

そのとき、またしても、ふしぎなことがおこりました。

恐怖王の仏像の笑い声が消えたかとおもうと、そのこだまのように、どこからか、べつの笑い声がひびいてきたのです。

「ワハハハハ……。」「

それは、恐怖王の声より、ずっと小さくて、まるでこだまのようでしたが、こんな家中でこだまがおこるはずはありません。

三人は、おどろいて、仏像の口をながめました。しかし、その口は、ぐっとむすばれていて、すこしも笑っていないではありませんか。

では、この笑い声は、いったい、どこから、ひびいてくるのでしょうか。

「ワハハハハ……。」

笑い声は、にわかになんて大きくなってきました。どうやら、うしろから聞こえてくるようです。

三人は、うしろをふりむきました。

入口のドアがひらいて、そこにひとりの少年が笑いながら立っていました。少年探偵団長の小林君です。

「やつ、きさま……。」

仏像にばけた恐怖王が、おどろいて、小林君の顔を見つめました。

「ハハハ……、きみは、明智先生にばけて、ぼくたちを屋根裏にとじこめたつもりだろうが、とつくに、ぬけだしてしまっただよ。そして、きみの計略のうらをかいてやったの

さ。ハハハ……、わかるかい。

きみは、せっかく苦心をして、仏像にばけたけれども、それは、なんの役にもたたなかつたんだよ。ハハハ……、わかるかい。」

小林少年は、さもゆかいそうに笑うのでした。

物おき小屋

「なんだと、なんの役にもたたなかつたと？」

黄金仮面はびつくりしたように、立ちどまりました。小林少年の知恵のあることを、よく知っているのです、なんだか、きみがわるくなってきたのです。

「ハハハ……、そうだよ。きみの部下が仏像をぬすみだして、左右からだくようにして、門の外へ出ていった。それをぼくたち少年探偵団がまちぶせしていて、追っかけたんだよ。そして、きみの部下が仏像をあき家のなかに、かくしたのを見つけ、それを取、ちゃんと取りかえしてしまった。ふたりのおまわりさんが、いまに、ここにはこんでくるんだよ。

きみはせっかく仏像にばけて、みんなをごまかしていたが、ほんとうの仏像が取りかえ

されてしまったのだから、きみの変装はなんの役にもたたなかつたのさ。わかつたかい。ハハハ……。」

恐怖王はそれを聞くと、ほんとうに、おどろいてしまいました。あの仏像が、はやくも取りかえされたとは、ゆめにも知らなかつたのです。仏像に変装したのは、まったく、むだぼねおりになつてしまいました。

恐怖王は、しばらくだまつて、つつ立つていましたが、しかし、このくらいのことでは、まけてしまうやつではありません。

やつと、氣をとりなおすと、ひとをばかにしたように笑いだしました。

「ワハハハ……、小林のチンピラは、なかなか、あじなことをやるねえ。だが、おれのほうには、いつも、おくの手が用意してあることを知っているだろうな。ハハハ……、チンピラが、いくら、いばつたつて、おれは、びくともするもんじやないよ。」

小林君は、このどたんばになつて、恐怖王がピストルでも出すのではないかと、からだをかたくしました。すると、あいては、はやくもそれをきつして、

「ハハハ……、おれは、とび道具のような、やばんなものは持つていないよ。血を見るのは大きらいだからな。それより、知恵だよ。おれの武器はおくそこの知れない知恵なのだ

」。

「フン、まけおしみをいってらあ。で、どんな知恵があるんだっ。」

小林君もまけてはいません。

「それはね、こうするんだっ。」

と、さけんだかと思うと、仏像にばけた恐怖王は、いきなり、小林君めがけて突進してきました。

そのいきおいが、あまりはげしくて、つきたおされそうなので、小林君は思わず、一方へ身をかわして、かたすかしをくわせました。

そして、いまにも、こちらへつかみかかってくるかと、身がまえていますと、恐怖王はかたすかしをくつたまま、小林君のそばを通りぬけて、玄関のほうへ矢のように、かけだしていつてしまったではありませんか。逃げたのです。

「みんな、来てください。あいつが逃げたから、つかまえてください……。」

小林君は、家じゆうにひびきわたるような声で、さげびながら、あとを追いました。

その声を聞きつけて、片桐さんとふたりの書生もかけだしてきました。

玄関をでると、まっくらな庭です。小林君はキョロキョロとあたりを見まわしましたが、

金色の仏像はどこへかくれたのか、姿が見えません。

すると、そのとき、表門のほうから、ふたりの警官がほんものの仏像をかかえて、はいってきました。そのあとから少年探偵団員やチンピラ隊の少年たちがぞろぞろとついてくるのです。

「仏像にばけた恐怖王が逃げたのです。あいつの姿を見かけませんでしたか。」

そこへ出て来た片桐さんが、警官に声をかけました。

「いや、あやしいやつには、であいませぬ。あいつが逃げたのは、いつごろのことですか。」

「たつたいまでです。門から出たとすれば、あなたがたと、すれちがったはずです。」

「それなら、門から逃げたではありません。ぼくたちは、だれにもであわなかつたのです。」

「それじゃあ、まだ庭の木の間に、かくれているのかな。」

「さがしてみましよう。みんなで、てわけをして、さがしてみましよう。」

片桐さん、書生ふたり、警官ふたり、少年探偵団員とチンピラ隊十七人のうちの七―八人（あとの八―九人はへいのまわりをとりかこんで、見はりをしているのです）。これだ

けの人数があれば、どこにかくれていても、さがしだせないはずはありません。それに少年たちも警官も、みんな懐中電灯を持っているのです。

それから、まつくらな、ひろい庭に懐中電灯の光が大きなホタルのように、あちこちと、木の間をとびちがい、どんなすみずみまでも、さがしまわるのでした。

ひとりの警官は、五人の少年をひきつれて、建物のよこを、うら口のほうへ、すすんでいきましたが、むこうのほうから、ひとりのおとなが歩いて来るので、もしや恐怖王ではないかと、サツと懐中電灯をむけました。しかし、それは、あやしいやつではなくて、いまままで、うら口の番をしていた、もうひとりの警官でした。警官は三人来ていて、そのひとりとは、ずっと、うら口にがんばっていたのです。

そこで、こちらの警官は仏像にばけた恐怖王が逃げたことをはなし、あやしいやつを見なかったかと、たずねましたが、なにも見なかったという答えでした。

さあ、わからなくなってきました。いったい、あいつは、どこへ、すがたをくらましたのでしょうか。

そのとき、小林君が懐中電灯をふりながら、かけつけてきました。

「へいをのりこして、逃げたものも、ないそうです。少年探偵団員とチンピラ隊の残りの

ものがへいをとりかこんで、見はりをしていましたから、見のがすはずはありません。あいつは、きつと、まだ庭の中にいるのです。」

小林君は、そこで、いきなり、声をひそめて、ひとりのおまわりさんの耳に、なにごとか、ささやきました。

「うん、そうかもしれないね。いつてみよう。」

おまわりさんはそういつて、もうひとりのおまわりさんにも、なにか、ささやきました。ここにいるのは、ふたりのおまわりさんと、五人の少年と小林君です。

小林君は、みんなのさきにたつて、庭のむこうのほうへ歩いていきました。

おもやから、すこしはなれて、木のあいだに物おき小屋が立っています。そのそばまで来ると、小林君は、足音をしのばせながら、入口の戸に近寄って、耳をすまして中のようすを、うかがいました。

ひよつとしたら、恐怖王はこの物おき小屋のなかに、かくれているのではないかと、思ったのです。

すると、そのときです。

いきなり、物おき小屋の戸が、なかからガラツとひらきました。そして、ひとりのへん

な男が、ヌーツと出てきたではありませんか。

少年たちは思わず逃げ腰になりましたが、よく見ると、それは、まったくべつの人間でした。

カーキ色のズボンにジャンパーをきた、顔じゆうに、ごましおひげのはえた、きたない男です。

「き、きみは、だれだつ。」

小林君がつよい声で、たずねました。

「このうちの庭番のじじいですよ。べつにあやしいものじゃありません。」

そういえば、片桐家には庭番のじいさんがいたはずですよ。

「いまごろ、物おき小屋なんかで、なにをしていたんだつ。」

警官のひとりが、たずねます。

「なあにね、昼間、ここへタバコをおきわすれたので、取りにきたのですよ。ほら、これですよ。」

じいさんは、そういつて、手に持っていたタバコの「しんせい」を見せました。

そして、そのまま、ふりむきもしないで、どこかへ立ちさってしまいました。

じいさんが、なかへはいったからには、物おき小屋に、あやしいやつがかくれているはずはありません。

そこで、みんなは、もつとべつのところを、さがそうと、歩きかけましたが、そのとき小林君は、なにを考えたのか、「あつ。」といって立ちどまりました。

木の上の人

「ねえ、おまわりさん。恐怖王は変装の名人ですなえ。だから、ひよつとしたら……。」

「えつ、それじゃあ、いまの庭番のじいさんが、あやしいというのか。」

「ええ、ひよつとしたら、あいつ、恐怖王が、ばけていたのかもしれませんよ。ああ、いいことがある。たしかめてみるんですよ。」

「えつ、たしかめてみるって？」

ふしぎそうな顔をしている警官には、かまわず、小林君は、いきなり戸をひらいて、物おき小屋の中へはいつていきました。

そして、懐中電灯で、小屋の中をさがしましたが、すぐに、それが見つかりました。

「あつ、やつぱりそうだ、おまわりさん、これをごらんなさい。」

その声に、ふたりの警官が、小屋の中にはいつてきました。

「ほら、これですよ。」

小林君は金色の仮面と、金色の衣と、金色のシャツやズボン下を、手にもっていました。金色の仏像にばけた変装の衣装です。

「あつ、それじゃあ、いまのじいさんが……。」

「そうですよ。ここに、じいさんのつけひげや服をかくしておいて、きかえたのです。金色の仏像から庭番のじいさんに、早がわりしてしまったのです。」

「しまった。それじゃあ、とうとう、逃げられたか。」

「いや、だいじょうぶです。へいのまわりには少年探偵団が見はつています。もし逃げだしたら、よびこの笛をふきならすはずです。だから、あいつは外へは出られないのですよ。まだ庭の中にいるにちがいありません。」

「よしつ、それじゃ、ほかのれんじゅうにもいつて、もう一度、さがすんだつ。」

警官のひとりが、かけだしていきました。ほかの人たちに、このことを知らせるためです。

それから、またしても、まっくらな庭のあちこちを、大きなホタルのような懐中電灯の光が、いそがしく、とびちがいました。

「あつ、あそこだつ、あそこにいる。」

それを見つけたのも小林少年でした。

懐中電灯の光がかすかにてらす、むこうの木の間を、さっきのじいさんが走っていました。

ピリピリピリ……と、よびこの笛が、ひびきわたりました。

どこからともなく、「ワーツ。」という声が出て、庭をさがしていたみんなが集まってきました。片桐さん、ふたりの書生、三人の警官、それに七―八人の少年たちです。

みんなは、なにか口々にわめきながら、じいさんのあとを追いかけてきました。

「あつ、いけない。あの高いシイの木にのぼりはじめたぞつ。」

ああ、ごらんなさい。庭番のじいさんは、十メートルもある高い木の、ふとい幹みきにしがみついて、まるでサルのように、のぼっていくではありませんか。

みんなはその木の下に集まって、たくさんの懐中電灯でじいさんの姿をてらしましたが、まもなく、その姿はしげった葉の中にかくれて、見えなくなっていました。

「ここで見はつてれば、だいじょうぶだよ。木のてっぺんまで、のぼったって、どこへもいけやしないんだから、そのうちに、つかれて、おりてくるにきまつているよ。こっちは、気ながに待つていれればいいんだ。」

おまわりさんが、のんきらしく、そんなことをいいました。

しかし、あいては魔法使いの恐怖王です。ほんとうにだいじょうぶなのでしょう。

そのとき、少年たちのうちにまじっていた、あのちっちゃなポケット小僧が小林少年のそばによつて、なにかささやきました。

「あつ、そうだ、そうかもしれない。」

小林君もすぐにそれに気づいて、おまわりさんに話しかけました。

「たいへんです。あいつは、空がとべるんですよ。ほら、あいつは、いつか京都の三十三間堂のそばの木のてっぺんから、空へとんでいったじゃありませんか。それから、ついこのあいだは、クイーン映画館の屋根から、夜の空へ、とんでいきました。あいつは、空をとべるのですよ。」

小林君にいわれて、警官たちも、やっと、そこに気がつきました。ああ、空をとぶあいてにかかつては、どうすることもできません。

それなら、あいつが、とびたないまえに、木のぼりをして、つかまえばいいようなものですが、とても恐怖王みたいに、木のぼりができるものではありません。枝もなにもない太い幹を、あんなにスルスルのぼるなんて思いもよらないことです。

警官たちは、「ちくしょうつ。」といって、くやしがりしましたが、どうすることもできません。

こちらは、木の上のできごとです。

庭番のじいさんにばけた恐怖王は、かるわざ師のような身がるさで、枝や葉のしげった中をグングンのぼっていききました。もう、てっぺんの近くまできたのです。

そのとき上のほうで、なにかゴソゴソと動いているような音が聞こえました。この木のてっぺんには、鳥でもいるのでしょうか。いや、鳥の羽音ではなかったようです。なにか、もつと大きなものの動く音でした。

恐怖王ははつとしてのぼるのをやめると、きき耳をたてました。

あいては、まだゴソゴソ動いています。

「だれだつ、そこにいるのは、だれだつ。」

恐怖王はおもわず、どなりつけました。

すると、ああ、これはどうしたというのでしょうか。いきなり、上のほうから、

「ワハハハ……。」

という人間の笑い声が、ひびいてきたではありませんか。

恐怖王はギョツとして、身をすくめました。

「ワハハハ、おい、そのやつ、おまえの道具どうぐは、こわしてしまったよ。もう、とぶことはできないぜ。」

恐怖王は、いよいよ、おどろいて、しばらく、だまっていました。木のとっぺんで待ちぶせているやつがあるなんて、くやしくてしかたがありませんので、思わずどなりかえしました。

「き、きさま、いったい、なにものだっ。」

すると、上のほうから、また、笑い声がして、

「きみのいちばん、おそれている人間さ。ハハハ……、わからないかね。ぼくは明智小五郎だよ。」

「えっ、明智だって……。」

ああ、なんという、いがないなことでしよう。片桐さんの庭のシイの木のとっぺんに、名探偵明智小五郎がかくれていたのです。それは小林君さえもすこしも知らないことでした。「ハハハ……、さすがの恐怖王も、びつくりしているね。きみが魔法使いなら、ぼくだって魔法使いだよ。」

きみは、ぼくが福井県から帰ったといつて、ぼくにばけて小林をだました。そして少年たちを屋根裏にとじこめたね。ところが、きみよりすこしあとで、ぼくはほんとうに帰ってきたんだよ。

それから事務所に帰って、るす番のマユミからこんどのことを聞き、すぐに片桐さんに電話をかけて、いつさいのいきさつがわかったのだ。

そこで、片桐さんに、ぼくの帰ったことは、だれにもいわないように口どめしておいて、夜になるのを待つてこの庭にしのびこみ、高い木のとっぺんを、つぎつぎと、さがしてみたのだ。

なにをさがしたとおもうね。ヘリコプターを小さくしたような背中にとりつけるプロペラだよ。ハハハ……。ぼくはそれを知っていたのさ。いまから五年ほど前に、あるどろぼうが、フランスで発明された小型プロペラを手に入れて、つかったことがある。機械を背

中にくくりつけて、空をとぶことができるとだ。ぼくはその機械を見たことがあるので、きみが空をとぶと聞いたときに、すぐそれを思いだしたんだ。

そして、このシイの木のてっぺんに、その機械がかくしてあるのをみつけたんだよ。ハハハ、これだけいえば、もうわかるだろう。

きみは、いざというときの用意にそのプロペラを、この木の上にかくしておいたのだ。それを、ぼくがさきまわりをして、動かないように、こわしてしまっただけというわけだよ。「明智のながい説明がおわると、恐怖王はくやしそうに、「ちくしょう……。」といって、逃げだしそうにしました。

しかし、下におりれば、木の幹のまわりを、おおぜいの人を取りかこんでいるのです。といって、上へのぼって、たとえ明智をつきおとすことができても、かんじんのプロペラがこわれているのでは、どうすることもできません。

さすがの恐怖王も、にっちもさっちも、いかなくなってしまいました。

きみは二十面相だ！

「アハハハ……、どうだね、まさか木のとつぺんに、ぼくがかくれていようとは思いか
けなかつたろう。そして、きみのさいごの切きり札ふだ、空中飛行のプロペラを、こわしてしま
つたとはね。ハハハハ……、おい、恐怖王君、なんとかいわないかね。」

明智の声が上のほうから、木の葉をとおして聞こえてきました。

「まいったよ。ここまでさきまわりしているとは知らなかった。で、どうしようっていう
んだ。」

「きみを、びつくりさせようというのさ。」

「びつくりさせる？ まだ、このうえにか。」

「うん、このうえにだよ。」

「いつたい、なんだ？」

「きみの正体さ。」

「えっ、正体？」

「きみの正体は、怪人二十面相だっ！」

明智の声が木の葉のしげったやみの中から、かみなりのようにひびきました。

恐怖王はだまりこんでいます。明智の声が、つづきました。

「れいによつて、きみは、かえだまをつかつて、うまく脱獄した。それからふたつき二月ほどたつと、仮面の恐怖王があらわれたのだ。変装のしかたで、きみが二十面相だということは、だいたいわかつていた。だが、はつきり、それとわかつたのは、きみが空をとんでからだ。小型のヘリコプターのような機械を背中にくつつけて、空をとぶやつはきみのほかにはいない。いつか、きみが宇宙怪人にばけたときに、フランスの発明家から買いいれたプロペラだ。そんな機械をもっているのは、日本では二十面相ひとりだからね。」

ところが、こうして明智がしゃべりつづけているあいだに、恐怖王の二十面相は、みょうなことをやっていたのです。

庭番のじいさんにばけた二十面相は、木の枝の上にこしかけて、左手で上の枝をつかみ、右手でふところから懐中電灯をとりだすと、その手をぐつとのぼして、へいの外のほうにむかつて、パツ、パツと、なんども、光を出したり、とめたりしたのです。

「おい、二十面相、だまつていないで、もう、かぶとをぬいだらどうだ。」

明智が、とどめをさすように、いいますと、いきなり笑い声がかえってきました。

「ワハハハハ……、明智君、おれは、おとなしく下におりるよ。だがね、おれは、いつでも、おくの手の、そのまたおくの手を用意しているんだぜ。」

黄金仮面にばけ、仏像にばけ、庭番のじいさんにばけ、さいごは、プロペラでとぼうとしたが、きみにじやまされてしまった。だが、おくの手は、これでおしまいというわけじゃない。まだまだ、おくのおくのおくの手が、かくしてあるかもしれないぜ。ハハハハ……」

二十面相の声が、だんだん小さくなつていきました。しゃべりながら、木の幹みきをつたつて下へおりていくらしいのです。

「オーイ、あいつが、いまおりていくぞうつ。逃がさないように用心してくれつ。」
明智は、そうさけんでおいて、じぶんも、おりはじめました。

下には、十数人の人たちが、てぐすねひいて待ちかまえています。

二十面相は、なにか考えがあるらしく、すなおに木の幹をつたいおけると、みんなの前に両手をさしだしました。三人の警官がすすみでて、そのうちのひとりが二十面相の両手にパチンと手錠をかけてしまいました。

それからパトロールカーをよんで警視庁へつれていくことになり、十数人の人たちは二十面相をとりかこんで、門のその大通りへ出ていきました。すると、そのときです。

ブルルルン……という爆音が聞こえたかと思うと、なにか大きなものが、みんなのあ

いだに、おそろしいいきおいで、つつこんできたのです。

スクーターです。

みんなは「あつ。」といって、道をあげました。すると、おそろしい早さで走っているスクーターへ、まるでかるわざ師のように、ぱつと、とびついたやつがあります。

「あつ、あいつだ。あいつが逃げたぞつ。」

おまわりさんが口々にさげびました。

スクーターのうしろにとびのつたのは、二十面相でした。かれは、いつのまにか、手錠をはずしてしまっていたのです。手錠ぬけなんて、奇術師の二十面相にはわけもないことでした。

そして魔物のような怪スクーターは、みんなのさげび声をあとにして、まっくらな大通りを矢のように走りさってしまいました。

ひとりの警官は、片桐さんのうちの中へとびこんでいって、警察署に電話をかけ、非常線をはるようにたのみました。

残るふたりの警官は、むこうに待っているパトロールカーにとびのつて、怪スクーターのあとを追いかけました。

それから二十分ほどのち、パトカーは、はるかにはなれた町のさびしい原っぱの草むらの中に、怪スクーターが横だおしになって、すてられているのを発見したのです。

しかし、スクーターにのつていたやつも、二十面相も、どこへいったのか、いくらさがしても、みつけることはできませんでした。

そのあくる日の新聞には、この事件がデカデカとのつたものですから、世間は、二十面相のうわさで持ちきりです。電車の中でも、バスの中でも、どこやさんでも、喫茶店でも、人間がふたり以上あつまれば、かならず二十面相の話がでるのです。

ああ、二十面相が、またやってきたのです。あいつは、いくど、つかまったことでしょうか。しかし、つかまっても、つかまっても、まるで不死鳥ふしちょうのように脱獄をして、世間にあらわれてくるのです。そして、東京はもちろん、日本じゅうの人びとをふるえあがらせてしまうのです。

二十面相は、いったい、どこにかくれてしまったのでしょうか。なにしろ、変装の大名入です。どんな姿になって、どんなところに、かくれているか、警察の大きな力でもなかなか発見することはできないのでした。

トランクの中

それから一週間ほどのちの、どんよりとくもった日の夕方のことでした。

小林少年とポケット小僧が、世田谷区のさびしい大通りを歩いていました。両がわには、ふつうの住宅と商店とがまじりあつて、ならんでいるのですが、商店街というほど、にぎやかではありません。

人どおりも、ごくまばらでしたが、そのとき、むこうから一台の大型自動車が走ってきて、小林君たちの前を通り過ぎました。

「あつ、あの自動車、あやしいぞつ。」

ポケット小僧が、さげました。

「えつ、なぜ、あやしいんだい。」

小林君が、たずねます。

「だって、ひかっただよ。金色に、ひかっただよ。」

「なにが、ひかっただよ。ぼく、気がつかなかつた。」

「顔が、ひかっただよ。自動車を運転しているやつ顔が、金色だったよ。」

「えっ、それじゃ、黄金仮面……。」

「そうかもしれないぜ。あつ、自動車がとまった。見なよ。あいつおりてくるよ。」
そうです。

その自動車は、百メートルほどむこうでとまって、中から、みような男がおりてきました。
た。

フワフワした黒いマントのえりをたてて、黒いソフトを、まぶかに、かぶっています。
夕方のことです。はつきりは見えませんが、ひさしをぐっとさげたソフトの下から、
キラツとひかる金色のものが見えました。たしかに黄金仮面です。

黄金仮面は、すなわち二十面相なのです。

その黒マントの男は、そこに店をひらいている、りっぱな美術商の中にはいつていきま
した。

「いってみよう。」

小林少年はポケット小僧をひきつれて、そと美術商の前に近づきました。

とまっている自動車は、からっぽです。二十面相がじぶんで運転してきたのです。

美術商には、りっぱなショーウィンドーがありました。中には片桐さんのよりはずと

小さいけれども、やつぱり古い鍍金とぎんぶつ仏が立っていて、そのまわりに、小さい仏像や、土の中からほりだした古代の人形などが、いっぱい、ならんでいました。

店の中をのぞいてみますと、黒マントの男はショーウィンドーの鍍金仏をゆびさして、店員になにかいっています。

「ねえ、小林さん、あいつは、あの鍍金仏を買うか、ぬすむかして、自動車にのせて、うちへもつて帰るつもりだぜ。だから、いつものようにして、ぼくたち、あとをつけようじやないか。そうすれば、あいつのすみかが、わかるよ。」

ポケット小僧がささやきました。

「うん、それがいい。ぼくも、そうおもっていたんだ。じゃあ、あの自動車のトランクが、ひらくか、どうか、ためしてみよう。」

小林君はそういって、店の中の黒マントに気づかれぬよう自動車のうしろへ近づいていききました。ポケット小僧も、そのあとについていきます。

「あつ、うまいつ。かぎがかかっていないよ。」

小林君はあたりを見まわして、人通りのないことをたしかめると、トランクのふたをひらいて中にもぐりこみました。そのあとから、ポケット小僧ももぐりこみました。

さいわい、トランクの中にはなにもはいつていなかったの、ふたりはからだをまげて、よこになることができました。

しかしだいじょうぶなものでしょうか。なにか、あとで、こまったことが、できるのではないでしようか。

ふたりは、あるだいじなことをわすれていました。そこに気がつけば、トランクなんかにかくれないで、赤電話で、明智先生なり、中村警部なりに知らせて、おとなの手で二十面相をとらえてもらうことにしたでしょう。それがいちばん安全なやりかたなのです。

小林君も、ポケット小僧も、おとなのたすけをかりないで、じぶんで、てがらをたてたいとおもったのが、いけなかつたのです。ふたりは、やがて、おそろしいめにあわなければならぬ運命でした。

それはさておき、こちらは美術商の店の中です。

店員はやつと黒マントの男の金色の顔に気づいて、あつとおどろき、まつさおになって身動きもできないでいました。

店には店員ひとり、だれもたすけてくれるものはありません。人をよぼうにも、おそろしさに声をだす力もないのです。

黄金仮面の二十面相は、ツカツカと、ショーウィンドーのうしろにはいつていつて、このガラス戸をあけ、鍍金仏を取りだすと、そのままぱつと、おもてに出ていつてしまいました。

二十面相は大通りに出ると、あたりを見まわしてから、鍍金仏をマントの中にかくして自動車に近づきました。

あつ、いけない。二十面相は運転席のドアをひらくまえに、自動車のうしろにまわったではありませんか。

きまつています。鍍金仏を後部のトランクの中にいれるためです。

小林君たちは、どうして、そこに気がつかなかったのでしょうか。

二十面相が仏像をぬすめば、それをトランクの中にいれるかもしれないことは、まえもつて、わかっていたことです。小林君たちは、それをうっかりしていました。

トランクのふたがスーツとひらきました。そして、そこに金色の顔のやつが立っていたのです。

「あつ、きさまたちは、小林と、ポケット小僧だな。よしっ、それほど、おれのあとがつけたいのなら、おのぞみどおり、つれていつてやる。そのかわり、とちゅうで、逃げだす

ことはできないぞ。いいか。」

と、いったかとおもうと、仏像を小林君たちのあいだにおしこみ、パタンとトランクのふたをしめて、カチツとかぎをかけてしまいました。

ああ、とんだことになりました。小林君とポケット小僧は、二十面相のとりこになったのです。どこへつれていかれるかわからないのです。そして、それから、どんなおそろしいめにあうか、わからないのです。

自動車は走りだしました。トランクの中で、いくらさげんでも外には聞こえません。だれもたすけてくれるものはないのです。

自動車はどこまでも、走りつづけています。一時間もたつたでしょうか。そのころから、きゆうに道がわるくなってきました。ゴトンゴトンとゆれるので、ふたりは両手で頭をかかえるようにしました。そうでないと、鉄板に頭をぶちつけるのです。

道がデコボコなばかりでなく、やがて、のぼりの坂道にさしかかったらしく、自動車の速度がにぶくなりました。

どこかの山道に近づいたのではないのでしょうか。もう美術商の前を出発してから、二時間もたっています。

それから、また三十分も走ったころ、やっと車はとまりました。いよいよ、二十面相のすみかについたのでしょうか。

しばらくすると、カチツと、かぎの音が聞こえ、トランクのふたがひらかれました。こわごわ、そとをのぞいてみると、黒マントの男ではなくて、二十面相の部下らしい、あらくれ男がふたり、目をひからせて立っていました。

外はもう、まっくらです。つめたい風がサーツと、ふきこんできました。山のおいです。森のおいです。ここは東京に近い、どこかの山の中にちがいないのです。

「チンピラども、出てこいっ。」

部下のやつが、大きなだみ声で、どなりました。

しかたがないので、小林君とポケット小僧は、トランクの外へはいだしました。

部下のひとりは鍍金仏をこわきにかかえました。それからふたりで、小林君とポケット小僧の手をつかんで、どこかへ、ひっぱっていくのです。

やみの中にブーツと黒い建物が見えました。レンガづくりの二階建てです。古い西洋館です。こんな山の中に、どうして西洋館があるのか、ふしぎでしたが、あとになって、そのわけがわかりました。

四人は、入口の鉄のドアをひらいて中にはいりました。自家発電をやっているのか、ひろい廊下にはうすぐらい電灯がついていました。

その廊下をいくつもまがって、二少年はおくまった一室につれこまれたのです。

そこは、りっぱな広い部屋で、てんじようからきりこガラスのシャンデリアがさがり、部屋じゆうをあかるくてらしていました。

まるで、宝石をちりばめたような、うつくしい部屋でした。

というのは、部屋のまわりに、りっぱなガラスのちんれつ箱がずらつとならんでいて、その中に、あらゆる美術品がおさめてあつたからです。古い仏像のかずかず、ピカピカひかる刀剣類^{とうけんるい}、宝石をちりばめた王冠、首かざり、うつくしい手箱や花びんなど、目を見はらせる美術品でした。

二少年は、それを見まわして、あつけにとられていきますと、正面のドアがひらいて、二十面相があらわれました。黄金仮面の変装です。

金色のターバン、金色のお能の面のようなぶきみな顔、金色のマント、金色のズボン、金色のくつ。

怪物は、金色の口を、キューツと、三日月形にひらいて笑いました。

「どうだ、たいしたものだろう。これが、おれの集めた宝ものだ。きみたちに奇面城をみつけられて、あそこの美術館がだめになってしまったので、ここに新しい美術館をつくったのだ。いや、ここばかりじゃない。おれの美術館は、ほかにもたくさんあるのだ。ここはその一部にすぎないのだ。」

奇面城の事件では、きみたちに、ひどいめにあった。ことにポケット小僧には、うらみがある。そこで、きみたちを、ここにつれてきて、思い知らせてやろうと考えたのさ。ころしはしない。おれは人ごろしがだいきらいだ。しかし、おそろしいめにあわせてやる。二十面相に、はむかうやつは、だれでも、こういうめにあうのだということを、はつきり知らせてやるのだ。」

「おれたちを、ごうもんする気だなつ。」

ポケット小僧が、さげびました。

「いや、ごうもんなんかしない。いたいめにはあわせない。ただ、おそろしいめに、あわせてやるのだ。」

「だが、ぼくたちを、ながくここに、とじこめておけば、明智先生がたすけに来てくださる。明智先生には、なんでもわかるのだからね。そうすれば、きみははめつだよ。せつか

くつくつた美術館もだめになってしまっただよ。」
と、小林君が、自信ありげにいいました。

「だまれ、きみのおどかしなんか聞きたくない。すぐに、地獄ゆきだつ。どんなにおそろしいめにあうか、見るがいい。そらっ……。」

と、いったかと思うと、小林君とポケット小僧の立っている床板がパツと、なくなつてしまいました。

二少年は、いきなり宙ちゆうにういて、そのままスーツと下におちていきました。

その床が、おとしあなになつていたのです。

二十面相がどこかのボタンをおすと、おとしあなの口が、ひらくようになっていたので、す。

ふたりは、まっくらな、ふかい地の底で、ひどくしりもちをつきました。

しばらくは、おきあがる力もありませんでしたが、ふと気がつくど、くらやみのむこうのほうに青く光るものが二つならんで、あらわれていたではありませんか。

それは、なにかおそろしい怪物の目のように思われました。

ゴリラ

「ね、小林さん、懐中電灯をつけてみようか。」

ポケット小僧がそつとささやきました。

あかるくしたら、ふたりのいる場所がわかるので、かえって、あぶないと思いましたが、しかし、あいての正体がわからないのは、いつそうぶきみですから、小林君は思いきって、懐中電灯をつけてみることにしました。

「うん、それじゃ、ぼくもつけるからね。いいかい。一、二、三つ……。」

そして、ふたりは、それぞれポケットから七つ道具の一つの万年筆型懐中電灯を取りだして、ぱつとむこうをてらしました。

「あつ、いけないっ。消すんだ。」

ふたりは、おおいそぎで、懐中電灯を消しました。

電灯の光にてらされたのは、何者だったのでしょうか。

それは一ぴきの大きなゴリラでした。動物園で見おぼえのある、あのものすごいゴリラでした。しかも人間ほどもある、でっかいやつです。

そいつが、へんな歩きかたでヨタヨタと、こちらへ、やってくるではありませんか。

電灯を消すと、もとのくらやみの中に、二つの青くひかる目がジリジリと、こちらへ近づいてきます。

ふたりは、なにを考えるひまもなく、手をとりあって、はんたいの方へ逃げだしました。地下室はひろいけれども、四方に壁があります。壁まで逃げたら、もう、どこへもいけないのです。

ふたりは、つめたいレンガの壁に、ぴったり身をよせて、ゴリラの目から、すこしでも遠くなるように、よこのほうへ、にじりよつていきました。

「あつ、ここにドアみたいなものがあるよ。」

壁をなでていたポケット小僧が、さげびました。

「え、どこに。あつ、そうだ。ドアだよ。あくかどうか、ためしてみよう。」

小林君が、ちからをこめて、そのドアらしいものを、おしてみました。

すると、そのあつい木の戸が、ギイ——といって、むこうへ、ひらいたではありませんか。

「いいかい。とびだして、すぐ、しめるんだよ。あいつがでてきたら、たいへんだからね

」。

小林君はそういって、ポケット小僧の手をひっぱって、そとへとびだすと、すぐに、ぴたり戸をしめて、中からひらかないように、からだをもたせかけました。

ふたりが背中を戸にあてて、足をふんばっているのです。

この建物は、山の中の坂道にたっているのです、おもてからいえば地下室でも、うらに出れば、そこは山の地面とおなじ高さなのです。

「そのへんに、棒きれか、大きな石が、ないかしら。そうすれば、戸がひらかないようにできるんだがな。」

小林君はそういって、懐中電灯で、あたりをてらしてみましたが、なにもみつかりません。森の中ですから、たくさん木ははえていますけれど、つつかい棒にするような、てごろの木ぎれなんか、どこにもないのです。また、地面には石ころがごろがっていますが、戸をひらかなくするほどの大きな石はありません。

そのうちに、ふたりが背中でおしている板戸が、ギシギシとうごきはじめました。中からゴリラがおしているのです。

「しっかり、ちからをいれるんだ。もし、この戸をひらかれたら、ぼくらの命はないんだ

よ。」

小林君がポケット小僧をはげましましたが、なにしろ、ポケットにはいるような小さな子どもですから、ちからはありません。それに、小林君も、少年探偵団の団長とはいっても、まだ少年です。

うんうんいって、足をふんばっているのですが、どうやら、中のゴリラのほうが、ちからが強そうです。ふんばっている足が、ジリツジリツと、前のほうへすべっていくではありませんか。

洞くつのなか

「もう、とてもだめだよ。逃げよう。あっちへ逃げるんだ。」

小林君は、ポケット小僧の手をひっぱると、やにわに、戸からはなれて、かけだしました。

中からは、ちからいっぱい、おしていたので、はずみをくって、ぱっと戸をひらき、茶色の大きなかたまりが、ゴロンと、ころがり出てきました。

ふたりの少年は、かけだしながら、うしろをふりかえって、それを見ました。くらやみに目がなれたので、あたりのようすが、ぼんやりと見えるのです。

大きなゴリラが、いきおいあまって、ゴロゴロところがるのが見えました。どこかをうったとみえて、ころがったまま、しばらくは、おきあがることもできません。

「さあ、このまに逃げるんだ。はやく、はやく……。」

小林君はポケット小僧の手をひっぱって、死にもものぐるいで走りました。ポケット小僧は足がみじかいので、とても、そんなにはやくは走れません。まるで、ひきずられるようにして、ついていくのです。

そこは、両がわに、きりたつたような岩山のそびえた谷底みたいな、せまい道でした。むちゆうになつて、走っていましたが、百メートルもいくと、とつぜん道がなくなってしまうしました。

ゆくてにも、たかい岩山がそびえて、ふくろ小路のようになっていたのです。道は、そこで、いきどまりなのです。

小林君はうしろをふりむきました。すると、ああ、もうだめです。あの大きなゴリラが、谷底の道いっぱいひろがって、ヨタヨタとこちらへ歩いてくるではありませんか。

「ゴウウウ……。」

おそろしい、うなり声が谷にこだまして、ひびいてきました。

ゴリラは、ながい両手をブランブランさせながら、ねこ背になって、首を前につきだし、おそろしいきばのある口をガツとひらいて、うなっているのです。

「チンピラども、逃がすもんか。」というように、うなっているのです。

ふたりは、もう生きたここちもありません。前と両がわは、きりたつたような岩山にふさがれ、うしろにはゴリラです。まったく逃げ場がなくなってしまうました。

ゴリラは、あいかわらず、ヨタヨタと歩いてきます。四つんばいになって走れば、一とびで、ここまでこられるのですが、そうはしないで、あと足だけでぶきみなかつこうで歩いていっているのです。ひよつとしたら、さつきころんだので、どこか、けがをしたのかもしれない。ません。

「あつ、こんなところに、ふかいほらあながあるよ。」

ポケット小僧がそれに気づいて、さげびました。

くらいので、よく見えなかつたのですが、たしかに、そこに、ほらあなの口がひらいていました。人間が立つて歩けるほどの大きな洞くつです。

なにも考えるひまありません。逃げ場は、ここ一つです。ゴリラはもう、すぐそこまで近づいているのです。ふたりは、いきなり、その洞くつの中へはいっていききました。

むちゆうになつて、かけこみましたが、考えてみれば、きみのわるいほらあなです。おくに、なにがすんでいるか、わかったものではありません。

かびくさい、ひやつとした土のおいがして、上から、ポトン、ポトンと、つめたいしずくが、ふたりの首すじへたれてくるのです。でも、かまわずに、三メートルほどすすみました。

「ゴリラのやつ、このほらあなに気がつくだろうか。」

ポケット小僧が、しんぱいそうに、ささやきました。

「うん、きつと気がつくよ。あいつは夜だつて目が見えるだろうし、ぼくたちのおいをかぎわかるからね。いまにやってくるにちがいないよ。しかし、そのまえに、このほらあなが、どんな場所だか、しらべてみなくっちゃ……。」

小林君はそういって、懐中電灯をつけると、あたりをてらしてみました。

入口をはいって、しばらくは岩山ですが、そのおくは土の山で、あなの両がわに、ふといまるたの柱が立っていて、その上に、おなじようなまるたがよこたえてあるのです。土

がおちるのを、ふせぐためです。おくのほうを、てらしてみると、そういう柱と横木が二メートルおきぐらいに、ずっと、つづいているようです。

「これは、なにかの鉱山だよ。鉱石をほりだすために、こんなあなをつくったんだよ。ぼくは鉱山のあなにはいったことがあるから、よくわかるんだ。しかし、これは、いまはもう、ほるのをやめた古いあなだよ。みたまえ、あの木の柱や横木がぼろぼろにくさって、いまにも、くずれそうになっているだろう。気をつけないとあぶないよ。」

小林君は説明しながら、だんだん、おくのほうへ、はいつていきました。

あとになって、わかったのですが、このほらあなは、ずっとむかし、鉱石ではなくて、徳川時代の金貨である大判小判をほりだすために、つくられたものでした。

明治維新いしんのとき、徳川幕府のご用金をこの山の中にかくしたという、いいつたえがあり、そのかくし場所をおしえる暗号文を手にいれた人が、ばくだいな費用をかけて、こんなあなを、ほったのです。

このあなは、ひじようにおくぶかく、また、いくつも枝道があって、うっかりすると道にまよって、出られなくなるほどです。

二十面相のすみかになっているあの赤レンガの西洋館も、金貨をほりだそうとした人が、

ここに腰をすえて仕事をするために、わざわざたてたものだといいます。

しかし、それはもう三十年も前のことで、いくらほつても金貨はみつからず、とうとう費用がなくなつて、やめてしまい、西洋館もそのまま、すむ人もなく、うちすてられていたのです。

二十面相はその古い西洋館を見つけだして、いろいろ手入れをして、じぶんのすみかにしたのでした。

さて、小林君とポケット小僧が洞くつの中へ、十メートルも逃げこんだときです。

「ゴウウウ……。」

なんともいえない、おそろしいうなり声が洞くつにこだまして、ひびきわたりました。

「あつ、ゴリラだつ。ゴリラがはいつてきたんだ。」

ポケット小僧が、ふるえ声を出しました。

小林君は、すばやく洞くつの入口のほうへ、懐中電灯をふりむけました。

やっぱりそうです。十メートルほどむこうに、あの大きなゴリラが立ちはだかっているではありませんか。

小林君は、いそいで懐中電灯を消しました。消したところで、あいては、くらやみでも

目のきくやつですから、なんにもならないかもしれないかもしれませんが、と行って、あかるくしていれば、いっそうあぶないのです。

そうして、また五―六歩前にすすんだときでした。

バタバタバタという、おそろしい音がして、なにか大きなものが、ふたりの頭の上を、かすめていきました。

怪物の目

「あつ、大きな鳥のようだったよ。なんだろう。」

ポケット小僧が、小林君に、しがみついてきました。

「きつとコウモリだよ。こういうほらあなには、たいてい、コウモリがすすんでいるもんだよ。」

小林君が、いつてきかせました。

そのとき、うしろのほうで、「ギャーツ。」という、ものすごいさげび声が出て、パタパタと羽をはばたく音が聞こえてきました。

「あ、わかった。ゴリラがコウモリをつかまえて、くっっているんだよ。……これであいつがこつちへくるのが、すこしおくれるだろう。さあ、このまに逃げるんだ。」

小林君はポケット小僧をひっぱって、おくへ、おくへと、すすんでいきました。まっくらな、でこぼこ道ですから、ときどき、パツ、パツと、懐中電灯をたらさない、あぶなくて歩けません。しかし、懐中電灯はすぐに消してしまふのです。いつまでもつけていては、ゴリラのめじるしになるからです。

二十メートルも、おくへすすんだでしょうか。パツと懐中電灯をつけてみると、あたりのようすが、かわっていました。

上からたれる水のしたたりは、ますますおおくなり、土がじめじめとやわらかくなって、両がわから道にながれおちています。

そのへんはまるたの柱もおおくなり、一メートルごとに立ててあるのですが、それがくさって、なかには、おれてしまっているものもあります。

いつ、頭の上から、土がくずれおちてくるかわかりません。それに、道にながれおちた土に、足がつつかかるので、歩くのにも、ひどく、ほねがおれるのです。

「ゴウウウ……。」

またしても、ゴリラのうなり声がひびいてきました。しかし、それは、ずっとうしろのほうからです。

なぜゴリラは、すぐに、ふたりにとびかかってこないのでしょうか。やっぱり、どこかに、けがをされていて、はやく走れないのでしょうか。

それとも、ネコがネズミをすぐにたべないで、おもちゃにして、よろこぶように、ゴリラもふたりの少年を、おもちゃにして、たのしんでいるのでしょうか。

そのとき、小林君が、うれしそうな声をたてました。

「あつ、枝道だつ。」

パツと懐中電灯をつけたとき、それをみつけたのです。ほらあなが右と左にわかれていました。右のほうが、左よりひろいような気がしました。

「よし、右へいこう。電灯をつけるんじゃないよ。ぼくたちが、どっちへいったか、わからせないようにするんだ。そうすれば、ゴリラは左のあなへはいつていくかもしれない。そして、ぼくらは、たすかるかもしれないのだよ。ぼくは、さっきから、枝道へくるのを待ちかねていたんだ。」

小林君は、そういつて、ポケット小僧の手をひいて、右のほらあなへすすんでいきまし

た。

すこしいくと、道がまがつていて、うしろから見えないようになりましたので、いそいで懐中電灯をパツとつけて、パツと消しました。

そのしゅんかん、一目で見たところでは、ほらあなのようすは、いままでと、あまり、かわっていないことがわかりました。

やつぱり、いまにもくずれそうな、やわらかい土、道にながれだした土の山、くさったまるたの柱。

「そつと歩くんだよ。ぼくらの歩く地ひびきでも、土がくずれるかもしれないからね。」

小林君はそういいながら、なおも、おくへすすんでいきましたが、五―六歩あるくと、ふと立ちどまつて、耳をすましました。

ゴソツ、ゴソツと、とおくから、土の中を歩く音が聞こえてきます。

「おやつ、こつちへ、やつてきたのかな。左のあなへはいったとすれば、こんなに足音が聞こえるはずはないんだ。」

小林君は、ささやくようにいって、じつと、やみの中を見つめました。

しかし、すぐむこうに、まがりかどがあるので、見とおしがきくわけではないのです。

ゴソツ、ゴソツ、ゴソツ……、足音はだんだん、こちらへ、ちかづいてきます。そして、やみの中に、チラツと青く光るまるいものがあらわれました。まず一つあらわれ、そして、もう一つ。

目です。ゴリラの目です。ゴリラの目が、まったくのやみの中で光るものかどうか、小林君は知りませんでした。このゴリラの目は、たしかにリンのように光っているのです。これには、なにか、わけがあるのではないのでしょうか。

そのおそろしい目を見ると、ふたりは、おもわず、「ワツ。」といって、ほらあなのおくへ、かけだしました。もう、地ひびきで、土がおちることなど、考えているひまはありません。

すこし走ったと思うと、またしても、「ワツ……。」という、さげび声がおこりました。なにかにつまずいて、たおれたのです。そして、ふたりは、つめたい土の中へ、顔をつっこんでしまいました。

そこに、ながれおちた大きな土の山があつたのです。その山が、道の左がわを、ふさいでいたのです。

ふたりは、一時はびつくりしましたが、それとわかると、そのままたおれているわけに

はいきません。すぐうしろにゴリラがせまっているからです。

あの青い二つの目が、つい五メートルほどむこうに光っているのです。

ふたりは、あわてて立ちあがると、手で土の山をさぐって、右がわのきれめを見つけ、そこを通って山のうしろがわにまわりました。

ゴリラのやつは、土の山のすぐむこうまでできていました。ふりむくと、リンのように光る二つの目が怒りいかにもえて、いつそう、かがやきをましたように見えました。

ああ、そのときです。天地もひっくりかえるような、おそろしいことがおこったのです。

落盤らくばん

とつぜん、ザーツという音が、どこからか聞こえてきたかと思うと、ふたりの頭の上から、やわらかくなつた土が、バラバラと夕立のようにふりそいできました。

とつさに、小林君は、ゴリラが手で土をすくって、ふたりにぶっかけているのではないかと思いましたが、そうではありません。もっとおそろしいことだったので。そのとき、あなの中に大異変がおこつたのです。

ゴーツと、地ひびきのような音が聞こえてきました。そして、やにわに、頭の上から、大きな岩や土のかたまりが、ダダーツとおちてきて、あつというまに、洞くつをすっかりふさいでしまいました。

落盤です。鉢山のかなをほっているときに、よくおこる、あの大きな土くずれです。鉢山では、落盤のために、何人も、何十人も、生きうめになることがあります。そういう新聞記事が、よく出ているのをごぞんじでしょう。

天地もひつくりかえるような、おそろしい音と、地ひびきがつづいたあとに、きゆうに、あたりはシーンとしまりかえってしまいました。

ああ、小林君たちは、とうとう土くずれの下じきになって、おしつぶされてしまったのでしょうか。

いや、そうではなさそうです。すくなくとも、すばしっこいポケット小僧だけは生きていました。かれは、おそろしいもの音がおこると、パツと、あなのおくへ身をかわして、たすかったのです。

ポケット小僧も、小林団長のことがしんぱいでした。さつき、土くずれの音にまじって、なんともいえない、ものすごいさけび声が聞こえました。それは人間とも動物ともわけの

わからない、ギヤーツというようなさげび声でした。もし、あれが小林団長のさいごのさげびだったとしたら……。

ポケット小僧はいそいで懐中電灯をつけて、そのへんをてらしてみました。ああ、よかった。小林団長は土の下じきにならないで、ただたおれているだけでした。あぶないころでした。もう五十センチむこうにいたら、おしつぶされているところでした。

しかし、たおれたまま身動きもしません。ポケット小僧は、また、しんぱいになってきました。もしや、おちてくる岩で頭をうって、死んでしまったのではないのでしょうか。

小僧は、小林君のそばへいって、口に手をあててみました。たしかに、息をしています。だいじょうぶ、命はたすかったのです。でも、ひどいけがをしているのではないのでしょうか。

小僧は、小林君をだきおこそうとしました。しかし、ポケットにはいるような小さな子どもですから、なかなか、だきおこせません。苦心をして、いろいろやっているうちに、小林君が目をひらきました。

「あつ、ぼく、気をうしなっていたのかい。」

「うん、そうだよ。けがはしなかった？」

小林君は、からだじゆうを、さすってみました。

「なんともないよ。なにかで頭をうったのかな。」

「おやつ、ひたいから血が出ているよ。」

「うん、そうだ。ここをうったんだ。それで、気がとおくなっただよ。」

小林君はハンカチを出して、きずをおさえていましたが、ふと、しんぱいそうな顔になつて、

「ぼく、どのくらい気をうしなっていた？」

「ちよつとだよ。一分ぐらいだよ。」

「それじゃあ、落盤があつてから、時間はたっていないのだね。で、あいつはどうしたんだい。」

「あいつつて？」

「きまつてるじゃあないか。ゴリラだよ。」

「ああ、あいつかあ。あいつね、土がおちたとき、すごいさけび声をたてたよ。でも、ぼくたちのかくれていた土の山より、ずっとむこうにいたから、うまく逃げたかもしれないよ。あつ、小林さん、ぼくたち、たすかったね。土がくずれて、道がとまってしまつて、

あいつ、こつちへこられなくなつたからね。」

ポケット小僧は、よろこびましたが、ふたりは、ほんとうにたすかつたのでしょうか。ゴリラより、もつとおそろしいことが、待ちかまえているのではないのでしょうか。

「とにかく、こつちからは出られないのだから、おくへはいっていくほかはない。おくへいけば、どつかで道がもとにもどつて、あなの外へ出られるかもしれない。」

そこで、ふたりとも懐中電灯をつけて、それをふりてらしながら、あなのおくへすすんでいきました。そして二十メートルも歩いたときです。

「あつ、いけない。こつちも土がくずれている。」

小林君がさげびました。

あながいきどまりのように、土でふさがれていました。ふるい落盤らしく土がかわいています。柱や横木がくさっているのです、ほうぼうに、こんな落盤があるのかもしれない。洞くつの両方がふさがっているのですから、二少年は二十メートルほどの長さのあなの中に、とじこめられてしまったわけです。

もう、たすかるみこみはありません。

「おれたち、そのうちに、息がでなくなるんじゃないだろうか。」

ポケット小僧は、はやくも、そこに気がついて、心ぼそそうにいました。

そうです。二十メートルあるといつても、せまいあなの中です。やがて空気の中の酸素がなくなってしまうたら、ふたりは、このまっくらな地の底で死ななければなりません。

「だいじょうぶだよ。懐中電灯の電池がきれるよりは、ながくもつよ。そのあいだに、ぼくたちは頭をしぼって考えるんだ。」

小林君が、ポケット小僧を安心させるようにいいました。

「おれたち、この土をほって、外へもぐりでるよりないね。」

「うん、だが、いまの落盤は、だめだよ。水でグシヨグシヨになっているから、いくらほつても、上から土がおちてくるばかりだからね。うっかりすると、第二の落盤がおこるかもしれない。そして、こんどこそ、ぼくたち、うずまってしまいかもしれないんだぜ。」

「そうだなあ。こまったなあ。」

ポケット小僧は小さな腕をくんで、さもこまったように、首をふるのです。

ああ、いったい、ふたりの運命はどうなるのでしょうか。小林君の頭に、なにかうまい考えがうかぶでしょうか。（もし、うかばなかったら……。）

がんばる力

「じゃあ、あつちのほうの土を、ほってみようか。ずっとまえにおちたんだから、もう、かわいているかもしれない。」

「うん。やってみよう。そのほかに、たすかるみちはないよ。」

そこで、小林君は、古いほうの落盤のところへいって、両手で土をとりのけてみました。そんなにかたくない土ですから、なんとかして、手でほることができません。

くさった材木の柱が、ななめにたおれて、土にうずまっています。その下の土をほっても、それ以上たおれてくるようすはありません。なにかにつかえて、動かなくなっているのです。第二の落盤がおこるしんぱいはないようです。

小林君は両手で土をすくいだして、五十センチぐらいのあなをつくりました。すくいだした土をうしろにおしやると、ポケット小僧がその土を、じやまにならない場所にはごぶのです。

ふたりはまっくらな中で、せつせとはたらきました。懐中電灯は電池をけんやくするために、消してしまっていたのです。

そのうちに小林君は指のつめのあいだに土がくいこんで、いたくてたまらなくなってきました。

「おい、きみ、ちよつと、かわつてくれよ。なにか、ほるものをさがすから。」

そういつて、ポケット小僧にかわつてもらつて、そのあいだに懐中電灯をつけて、あたりを見まわしました。

「あつ、あつた。これがいい。」

三角形のひらべつたい石です。それを土の中からほりおこして、つかつてみますと、けっこう、シャベルのかわりになることがわかりました。

この石のシャベルをみつけてから、きゆうに仕事がかどつて、土をほりだしたあなが、だんだんふかくなり、やがて、せまいあなの中にもぐりこんで、仕事をしなければならなくなりました。くるしい仕事です。そんなにかたくない土ではありましたが、一メートルあまりほりすすむと、すっかりくたびれてしまいました。

「きみ、ひとりでやつては、とてもくたびれてだめだよ。交替制にしよう。ぼくときみとで、かわりあつて、ほる役をやるんだよ。」

ひとりがほれば、もうひとりとは、その土をあなのそとに、はこびだすのです。三十回土

をはこびだしたら、交替ときめました。そして、また、いつしようにけんめいに仕事をつづけるのでした。

「ねえ、小林さん、こんなに苦心してここをぬけだしても、このむこうがわがどうなっているか、わからないね。」

ポケット小僧がくらやみの中で、土をはこびながら話しかけてきました。

「うん、そりゃあ、そうさ。」

「もし、これからさきのあなが、ぜんぶうずまっていたら、どうする？ ほつても、ほつても、どこへも出られないじゃないか。」

「そりゃあ、そうだよ。」

「もし、むこうのあなが、ふさがついていないとしてもね、そのあなを歩いていくと、つきあたりになってしまうんじゃないだろうか。おれたちは、どっちにしたって、たすからないのかもしれないぜ。」

ポケット小僧は、ベソをかくような声でいいました。

「おい、おい、いくじのないこというんじゃないよ。ぼくは、いろんな冒険談を読んだけどね、こういうときにはしんぼう強くがんばるのが、いちばんだいじなんだ。あくまで、

がんばりぬくんだよ。そうすれば、ひとりでに、運がひらけてくることがある。神さまがたすけてくださるんだ。

もうだめだなんて、あきらめてしまったら、おしまいだよ。神さまだって、そんなよわむしは、たすけてくれやしない。ね、ポケット君、がんばるんだよ。がんばりさえすれば、きつといいことがあるよ。」

ところが、小林君が、がんばれ、がんばれといって、はりきつたので、とんでもないことが、おこってしまいました。

二メートルもほりすんだときです。土の中にあるくさった柱がじやまになるので、それをとりのけようとして、ぐつとひっぱったかとおもうと、ダダダダ……と音がして、その土が小林君の頭の上から、くずれおちてきました。そして腰から上のほうが、ぜんぶうずまってしまったのです。

「う、う、う、……。」

と、いいましたが、さけぶことも、どうすることもできません。顔がびっしり土につつまれてしまって、さけぶどころか、息をすることもできないのです。このまま、ほうっておけば、死んでしまいます。

ポケット小僧は大きなものおとにびつくりして、懐中電灯をつけて、あなのおくをてらしてみました。

小林団長の両足が、くるしそうに、もがいています。頭のほうは土にかくれて見えません。

「わっ、たいへんだっ。」

ポケット小僧は、いきなり両手で小林君の足をつかんで、エンヤラ、エンヤラ、ひっぱりだそうとしました。

土が重いので、なかなかうごきません。でも、大すきな小林団長が死んだらたいへんですから、ポケット小僧は顔をまっかにして、しんぼう強く足をひっぱりつづけるのでした。土にうずまつている小林君にも、それがわかりましたので、土の中で、両手を力まかせに動かして、からだをうしろへずらすようにしました。

こうして、ふたりの力があわさったので、小林君のからだは一センチずつ、一センチずつ、土の中からぬけだすことができました。

しかし、それには、ながい、がまん強い努力をつづけなければなりませんでした。ほんとうに、一センチずつ、一センチずつです。からだをぜんぶ、ひきだすまでには、ずいぶ

ん時間がかかりました。

「ああ、ひどいめにあつた。」

小林君はどろだらけになつた顔をハンカチでふきながら、ハアハアと、肩で息をしています。よほどくるしかつたのでしよう。

「いったい、どうしたつていうの。」

ポケット小僧が、懐中電灯で団長のみじめな顔をてらしながら、たずねました。

「ぼくがいけなかつたんだよ。ほつていくと、土の中に木の棒がじやましていたので、力まかせに、ひっぱりだそうとしたんだ。そのはずみに、上から土がおちてきたんだよ。落盤というほど大きな土くずれじゃないけどね。これからは、気をつけてほるよ。」

「じゃあ、まだ、ほるつもりかい、こんなことがあつても。」

ポケット小僧は、小林君の勇氣におどろいているのです。

「もちろんだよ。こうなつたら、運を天にまかすのだ。そして、人間の力で、できるかぎりのことをやってみるんだ。さいごまでがんばるんだよ。」

ふたりは、しばらくやすんでから、また、あなの中にはいりました。小林君は懐中電灯で、さつきくずれたところをしらべていました。

「だいじょうぶだよ。上のほうに、もう一本、材木が横になっていて、これはビクとも動かない。その下をほれば、あぶないことはないよ。」
と、いつて、さっそく仕事をはじめた。

やっぱり、交替をして、かわるがわる、ほるのですが、それからの、ふたりのはたらきは、じつにめざましいものでした。ゆっくりしていたら、酸素がなくなって、死んでしまうのですから、いそがないわけにはいきません。

もう、真夜中でした。腕時計を見ると、一時になっていました。

ポケット小僧も、よくはたらきました。小林君は、小僧のがんばりのきくの、すっかり、おどろいてしまったほどです。

もう、あなのふかさが三メートルをこしていました。しかし、このくるしい仕事は、いったい、いつまでつづくのでしょうか。もう、腕も、肩も、腰もしびれたようになって、いうことをきかないのです。ふたりは、ときどきあなの外へでて、やすみました。そして、しびれた腕や肩をさすって、力をとりもどすのでした。

ポケット小僧は、もう、すこしもぐちをいいません。死ぬまでほりつづけるのだと決心しているようでした。

それから、ふたりはまた、あなの中へはいつて、仕事をはじめました。そしてシャベルがわりの平べったい石で、三度か四度、土をすくいだしたときです。

ぐつと石をおすと、なんの手ごたえもなく、石がむこうへぬけてしまったではありませんか。

そこに、ポツカリとあながあいたのです。そのあなから、つめたい、おいしい空気がサ―ツとながれこんできたではありませんか。

小林君はドキンとして、懐中電灯で、そのあなの外をのぞいてみました。

「あつ、とうとう、つきぬけたぞつ。」

おどりががるような、さけび声でした。

あなの外には、ひろいほらあなが、ずっとむこうまで、つづいていたのです。ふたりのがんばる力で、あつい落盤の壁をうちぬいてしまったのです。

さつき、小林君がいったとおり、神さまはさいごまでがんばるものの味方でした。

ふたりは、つきぬけたあなを大きくほりひろげて、そこから、おくのひろいあなへ、はいだしました。

しかし、これで、ほんとうに、たすかったのでしょうか。このあなが、また、どこかで、

いきどまりになっていたら、どうすればいいのでしょうか。

やがて、懐中電灯の電池がつきてしまふにきまっています。そうすれば、まったくのくらやみの中を手さぐりで、さまよわなければならぬのです。

「小林さん、ぼくたち、たすかるだろうか。ひよつとしたら、このまま生きうめになってしまふんじゃないだろうか。」

ポケット小僧が、また、ベソをかくような声を出しました。

土の中のゴリラ

「なあに、運を天にまかして、いけるところまでいってみるんだよ。そのうちに、なにか、いいことがあるかもしれない。ただしんぼうして、じっとしていたんじゃ、ぼくたちは死んでしまふんだからね。」

小林君は、ポケット小僧の手をひいて、はげましながら、まっくらなほらあなを歩いていきました。懐中電灯は持っていますが、むやみにつかっただけで電池がなくなってしまうので、ときどき、パツパツとつけて、あなのようすを見ると、すぐ消してしまふのです。

さつきからの、はたらきで、ふたりとも、つかれはてていました。そのへんに、うずくまっていたいのを、やつとがまんして、ヒョロヒョロと歩いているのです。

いきどまりになるのではないかと、びくびくしていましたが、そのようすもありません。あなはうねうねまがりながら、どこまでもつづいています。

「むかしの金貨が、うずめてあるというので、ほれるだけほってみたんだろうね。そして、なんにも見つからなかったというんだから、よつほど運がわるかったのだね。たいへんなお金をつかったにちがいないよ。」

小林君が、ひとりごとのようにいいました。まえにもかいたように、この山には徳川幕府のご用金がうずめてあるといううわさがあつて、あるお金持ちが、それをさがすために、こんな鉱山のようなあなをほらせたのです。

「よくばるから、そんなするんだよ。小判がうめてあるなんて、うそつぱちにきまつてらあ
」

ポケット小僧は、おこつたような声でいいました。

「こんなあながあるもんだから、おれたち、ひどいめにあつたじゃないか。」

「おいおい、ポケット君、きみは、このあなのおかげで、ゴリラからたすかつたことを、

わすれたのかい。」

「うん、そりゃそうだけどさ。」

しばらくだまって歩いていましたが、ポケット小僧がかなしそうな声を出しました。

「おら、はらがペコペコだよ。もう、歩けないよ。」

「ぼくだってそうさ。がまんしなきゃ、しかたがないよ。はらがへるどころか、じつとしてたら、死んでしまうんだからね。歩くほかに、たすかるみちはないんだよ。」

小林君はポケット小僧をはげしながら、なおも、すすんでいきました。

しばらくすると、

「なんだか道がへんだよ。懐中電灯をつけてみよう。」

そういつて、万年筆型の懐中電灯をつけ、前をてらしました。

「あつ、枝道だ。どっちへいったらいいだろう。」

「ほんとだ。このあなは長いんだなあ。左のほうか、すこしひろいよ。」

「うん、そうだね。じゃあ左のほうへいくことにしよう。」

ふたりは左のあなへすすんでいきましたが、十メートルもいくと、また枝道がありました。

「わあ、また枝道だ。やつぱり左にしよう。右へいたり、左へいたりすると、あともどりになるかもしれないからね。左ときめたら、左ばかりにしよう。」

そういつて、ふたりは左へまがりました。それから、すこしいくと、また、枝道にぶつかりましたが、やつぱり、そこでも、左のほうの道をえらびました。

そして、しばらく歩いているうちに、あたりのようすが、ちがってきました。空気がじめじめして、息がつまるようなかんじです。小林君はへんだなと思って、懐中電灯をつけてみました。

「あつ、いきどまりだつ。」

ポケット小僧が、さげびました。あなのむこうに、土の壁がたちふさがっているのです。とうとう、いきどまりへ、来てしまいました。ふたりは、もう、いよいよ、たすからないのでしょうか。そのとき、どこからか、

「ウーン、ウーン……。」

という、うなり声が聞こえてきました。

ふたりは、おどろいて、キョロキョロと、そのへんを見まわしました。

「あつ、あれだ。ゴリラだよ。あいつ、はんぶん、土にうずまって、くるしんでいるんだ

よ。」

みると、いきどまりの土の下から、ゴリラの首と背中が見えています。上から土がおちてきて下じきになったらしいのです。

「あつ、わかつたつ。」

小林君が、びつくりするような声で、さげびました。

「ポケット君、わかつたよ。これは、さつき、ぼくらが落盤にであつた場所の、ほんたいがわなんだ。ゴリラは、ぼくらをおいかけて、ここまで来ていたんだよ。そこへ、落盤がおこつたものだから、下じきになってしまったんだ。あいつけがしていたので、逃げるこゝとができなかつたんだよ。」

「だが、へんだね。どうして、おれたち、ほんたいがわへ出られたんだらう。」

「枝道が三つもあつたし、道がぐつと、まがつているので、いつのまにか、もとのところへ、もどつてきたんだよ。」

「じゃあ、小林さん、おれたち、さつきの枝道を、左へまがらないで、右へまがれば、あの外へ出られたんだね。」

ポケット小僧が、それに気づいて、うれしそうにいました。

「そうだつ。きみのいうとおりだ。ここから、もとへもどるんだったら、あの枝道を、やつぱり左へまがればいいわけだよ。そうすれば、ぼくたちは、あなの外へ出られるのだ。」

小林君も、あかるい声でいうのでした。

「ウーン、ウーン……。」

うなり声がつづいています。しかし、あの大ゴリラにしては、へんなうなり声です。人間のうなり声に、にているのです。

「あつ、ゴリラの背中がわれているよ。」

ポケット小僧は、じぶんの懐中電灯で、それをてらしながら、さげびました。

見ると、うつぶせになつて、半分土にうずまつているゴリラの背中が、たしかに、われているのです。落盤のときに石にうたれて、大けがをしたのでしょうか。

いや、けがではありません。背中中の毛皮が、さけるようにわれて、その下から赤い血ではなくて、黒いものが見えているのです。二少年は、おずおずと、そばに寄つて手でさわってみました。

「あつ、これ人間だよ。人間が、ゴリラの皮をきいているんだよ。」

ポケット小僧がさげびました。われたところから見えているのは、黒いシャツのようで

した。

「それじゃあ、頭も、ゴリラの頭をかぶっているんだろうか。」

小林君が、大きなゴリラの頭を動かしてみました。手ざわりがへんです。ゴリラのはくせいの頭らしいのです。

「ポケット君、これをぬがせてみよう。」

そういつて、ふたりが、力をあわせて、ゴリラの頭を、まわしたり、ひっぱったりしていますと、だんだん、胴体からはなれてきて、やがてスッポリとぬけてしまいました。

「なあんだ、こんなものかぶっていたのか。ごらん、目のところにガラスをはめて、中に豆電球がとりつけてあるよ。」

小林君は、中からつぽになったゴリラの頭の内がわを見せました。あの青くひかる、おそろしい目は青い豆電球だったのです。

ゴリラの頭を、ひきぬいた下には、三十ぐらゐの男の顔がよこたわっていました。その顔が、さも、くるしそうに、ゆがんで、「ウーン、ウーン。」とうなっているのです。

この男がゴリラの毛皮をきてゴリラにばけて、ふたりの少年をおどかしていたのです。

大発見

「こいつ、二十面相の部下かしら。」

ポケット小僧が、にくにくしそうに、その顔を見おろしていました。

「そうかもしれない。だが、ひよつとしたら……。」

小林少年が、そういいかけて考えています。

「えっ、ひよつとしたら、なんなの？」

ポケット小僧は、びっくりして、小林君の顔を見つめました。

「こんな大役を、部下にやらせるだろうか。こいつが、きつと二十面相だよ。ぼくたちは、だれも二十面相のほんとうの顔を知らない。いつでも、へんそうしているんだからね。だからきつと、こいつが二十面相だよ。」

ふたりは、しばらく顔を見あわせて、だまりこんでいました。

あのおそろしい二十面相の顔を、こんなに近くで見られようとは、思いもよらないことでした。しかし、そいつは、土の下じきになって、うなっているのです。このまま、ほうっておけば、死んでしまうにきまっているのです。小林君は、いくら悪者でも、ころして

しまうことはできないと思いましたが。たすけてやらなければなりません。そして、警察にひきわたすのです。それには、まず、こいつが二十面相かどうかを、たしかめなければなりません。

「おい、きみは二十面相だろう。ほんとうのことをいうんだ。」

そうよびかけると、ウーン、ウーンという、うなり声がとまりました。そして、くるしそうな声で、かすかに口をききました。

「た、たすけて、くれるか？」

「きつと、たすけてやる。そのかわり、ほんとうのことをいいたまえ。きみは二十面相だね。」

「うん、そ、そうだ。」

「よし、わかった。だが、ぼくたちの力では、どうすることもできない。いま、おとなの人を、よんでくるからね、すこしのあいだ、がまんしているんだ。」

小林君はそういって、あなの外へ、ひきかえそうとしました。そのときです。

「わあつ、たいへんだあ。」

ポケット小僧の、とんきようなさけび声が、洞くつの中にひびきわたりました。

「ど、どうしたんだ。ポケット君。」

小林少年が、びっくりして、たずねました。

「小判だよ。小判がウジャウジャあるよ。ほら、ここにも、あつちにも……。」

懐中電灯の光の中に、ピカピカひかっているのは、たしかにむかしの金貨の小判でした。それが落盤の土の中にいっぱいまじっているのです。

小林君は、その一枚を手にとってみました。たしかに重い黄金の小判です。かぞえてみると、土の中から頭をだしているのだけでも、百枚以上ありました。上のほうの土の中に、木の箱のくさつてこわれたのが見えています。小判をつめた箱が、こわれて、小判がちらばったのでしよう。

「ああ、わかった。このあなのてんじょうの上に、小判の箱がうずめてあったんだ。それが、落盤でここへおちてきたのだ。この上には、まだどれだけ小判の箱が、うずまっているかshれないぞ。」

じつに大発見でした。むかし、お金持ちの人が、これだけ大じかけなあなをほつても見つけることのできなかつた、幕府のご用金が、落盤のおかげで、小林少年とポケット小僧によつて発見されたのです。

「だけど、これはぼくたちのものには、ならないね。」

「むろんだよ。このあなをほらせた人の子どもか孫が、きつとまだ権利を持っているよ。とにかく、はやく、このことを警察に知らせなければ……。」

小林君はポケット小僧の手をひっぱって、その場を立ちさろうとしました。すると、土にうずまわっている二十面相が、

「おい、こ、こばやし君。お、おれをはやく、た、たすけてくれ……。」「
と、くるしそうな声でよびかけました。このまま、ほうっておかれては、たいへんだとおもったのでしよう。

「よし、わかつているよ。じきに、たすけだしてやるから、しばらくがまんしているんだ。」

そういいすてて、ふたりは、あなの入口のほうへいそぎました。ながい道ですが、前に一度とおったところですから、もう、しんぱいはありません。

まもなく、はるかむこうに、パツとあかるいあなの入口が、小さく見えてきました。やつと太陽の光を見て、いきかえった気持です。おいしい空気が、そよそよとながれてきました。

その小さな、あかるいあなが、すすむにつれて、だんだん大きくなり、ふたりは、とうとう、さわやかな夜あけの光の中に出ました。ゆうべおそくから、ひとばんあなの中でくらしただのです。時計を見ると午前五時でした。

「西洋館の門の中に、二十面相の自動車がおいてあるはずだよ。あれをとばして、ちかくの町の警察へ知らせよう。ついでに医者もつれてくるんだよ。二十面相はひどくやられてるから、手あてをしてもらわなくちゃ。」

小林君がいいますと、ポケット小僧は、しんぱいそうな顔をしました。

「このままいっちゃって、だいじょうぶかい。西洋館の中には二十面相の部下がいるよ。あいつらが、あなの中にはいつて、二十面相をたすけだし、小判を持って逃げちゃったら、たいへんだぜ。」

「だいじょうぶだよ。あいつたち、まだグウグウねているよ。それに、たとえ、あの洞くつに気がついたところで、二十面相のうずまってるところまでいくのが、たいへんだよ、そこへいったとしても、よいいに、たすけだせやしなよ。」

部下のやつが二十面相を見すてて、小判をぬすむ気になったとしても、あのあなのでんじょうをほって、たくさんの小判の箱を取りだすだけでも、三時間や四時間はかかるから

ね。だいいち、ぼくらが自動車にのっていつてしまえば、やつら、どうすることもできやしないよ。この山を歩いて逃げだしたら、うろうろしてるうちに、つかまってしまおうよ。」

小林君の説明をきいて、ポケット小僧も安心しました。

小林君は自動車の運転がじょうずでした。ふたりは、二十面相の自動車にのると、しずかにスタートさせて山をくだっていくのでした。

それから四時間ほどたったときには、山の西洋館は十八人という人数で、ごったがえしていました。ちかくの町の警察から八名の警官と、その町の医師、それから電話れんらくによつて、明智探偵と警視庁の中村警部、その部下の刑事が五名もやってきました。それに小林少年とポケット小僧です。西洋館の門の前には五台の自動車がとまっていました。まず、落盤の下じきになつていた二十面相をたすけだし、西洋館のベッドにねかせて、医師がてあてをしましたが、二十面相はどうぶん身動きもできないだろうということでした。

西洋館にいた四人の部下は、ぜんぶ手錠をはめられ、自動車で警察へつれていかれました。

洞くつのでんじょうにかくされている小判の箱をぜんぶ、ほりだしたのは、それから二

日のちのことでした。小判の箱は五十個出てきました。ぼくだいな金額でした。幕府のご用金がうずめてあるという、いいつたえは、やっぱり、ほんとうだったのです。

その大金は、山の権利を持っている人にひきわたされましたが、その人は小林少年とポケツト小僧に、ぜんたいの百分の一にあたる五百万円の現金を、お礼としてくれることになったのです。

ふたりは、おとうさんも、おかあさんも、死んでしまっていないので、お金をあげる人もありません。五百万円ぜんぶを明智先生にあずかってもらって、探偵事務所と少年探偵団のためにつかうことにしました。

しばらくして、少年探偵団の集まりがあったとき、団員たちは、小林団長にたずねました。

「明智先生は、あのお金を、なににつかうつもりだろうね。」

「それはまだわからないよ。探偵の仕事に、いちばんためになることに、つかおうっていらつしやるんだ。」

「じゃ、小林団長なら、なににつかいますか。」

「ぼくなら、けいたい無線電話機がほしいね。五つでも六つでもいい、ぼくらがそれをも

つて、探偵事務所と話ができるようになれば、どんなにべんりかshれないよ。わるものにつかまって、とじこめられても、そこから、平気で事務所の先生と話ができるんだからね。

「わあつ、すてきだ。それにしよう。明智先生に、それをそなえてくださるように、たのもうよ。」

「それがいい、それがいい。」

「わあい、少年探偵団、ばんざあい。」

少年たちのあいだに、さかんな拍手がおこりました。

この計画は、明智探偵も、きつと、さんせいするでしょう。そして、少年探偵団がけいたい無電機をもつ日も遠くなくかもしれません。そうなったら、かれらは、いままでみられなかったような大活躍をするでしょう。その日がまちどおしいではありませんか。

青空文庫情報

底本：「仮面の恐怖王／電人M」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年8月8日第1刷発行

初出：「少年」光文社

1959（昭和34）年1月号～12月号

入力…sogo

校正：茅宮君子

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仮面の恐怖王

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>